

王漁洋『花草蒙拾』訳注(一)

荒井 禮

凡例

・本訳注は、清代の詩人王士禛（字は、貽上、号は阮亭・漁洋、山東新城（桓台县）の人。一六三四～一七一）の詞論『花草蒙拾』の訳注である。

・底本には、王士禛・鄒祗謨共編『倚声初集』（『続修四庫全書』第一七二九冊）卷三所収の『花草蒙拾』を用いた。校勘には、昭代叢書本を用いた。ただし、異体字の類は注記せず、明らかに文字が異なる場合のみ、【注釈】に付記した。

・本訳注で使用する漢字は、新字体を用いた。ただし、餘と余、辨と弁、藝と芸など、新字体では意味が紛らわしくなるものは、旧字を用いた。

・訳注は、【原文（条数）】、【書き下し文】、【注釈】、【訳文】、【餘説】の順となっている。【餘説】は、各条目で訳注者が気になったところに設けて論じたものなので、通読するのであれば、【餘説】はとばして読んで差支えない。

・【注釈】に引用した中国語の論文は、先ず筆者訳を挙げ、後に原文を付した。

・【注釈】に引用した詩詞にも、語注をつけた。その場合、

※印を付して区別した。また、引用した詩詞文で、少し長めのもの、『花草蒙拾』を解釈するうえで直接参考になるようなものは、書き下し文と区別しやすくするため、太字にした。

・【訳文】では、言葉を補ったところがある。しかし、補った部分は一一明示しない。

・拙稿をご覧になった方々のご批正、ご示教を得ることができれば多幸である。

【序文】

往読『花間』・『草堂』、偶有所触、輒以丹鉛書之、積数十条。程邈強刻此集卷首、僕不能禁。題曰『花草蒙拾』、蓋未及広為揚摧、且自愧童蒙云爾。

【書き下し文】

往に『花間』・『草堂』を読み、偶たま触るる所有れば、輒ち丹鉛を以て之れを書し、積むこと数十条。程邈強ひて此の集の巻首に刻せんとして、僕禁ずること能はず。題して『花草蒙拾』と曰ふは、蓋し未だ広く揚摧するを為すに及ばず、且つ自ら童蒙なるを愧ずればなりと爾云ふ。

【注釈】

(1)『花間』 『花間集』のこと。五代後蜀の趙崇祚によって編纂された。後蜀・欧陽炯の序文がある。晩

唐・五代の詞（詩餘）を収録している。

（2）『草堂』 『草堂詩餘』のこと。通行本は四巻。編者不明。ただし、編纂されたのは、南宋のころとされている。唐宋の詞を収録しており、通行本には、詞の後に詞話が付されていることもある。明・顧從敬家藏本があり、『四庫全書』に収録されているのは、この本。

（3）丹鉛 丹砂と鉛粉（胡粉）。むかし、文書の校訂に用いた。ここでは、覚書をした、というほどの意味。

（4）程邨 清・鄒祗謨のこと。字は訐士、号は程邨、江南武進（江蘇省常州市武進区）の人。順治一五年（一六五八）の進士。著作に『遠志齋集』・『並麗農詞』などがある。王漁洋の『感旧集』巻一一に簡単な伝記、及び詩一首が収録されている。王漁洋の『居易録』巻四に、「国朝名家填詞甚富。二十年前、余在揚州、与故友武進鄒程邨撰『倚声集』、起万曆迄順治、以继卓珂月・徐野君『詞統』之後（国朝の名家の填詞甚だ富む。二十年前、余れ揚州に在りしとき、故友の武進の鄒程邨と『倚声集』を撰す、万曆より起りて順治に迄るまで、以て卓珂月・徐野君の『詞統』の後を継ぐ）」とある。また、清・王暉『今世説』巻三の人物注に、「鄒名祗謨、字訐士、江南武進人。戊戌進士。天資穎異、過目靡所遺忘。上自經籍・子・史、下逮藝文・雜著、旁及天文・宗教・百家之書、細至古今人爵里・姓氏・世次・年譜、無不悉記。至性沈摯、意氣真

篤、与人交久、要不忘（鄒名は祗謨、字は訐士、江南武進の人。戊戌の進士。天資穎異にして、目を過ぐれば遺忘する所靡し。上は經籍・子・史自り、下は藝文・雜著に逮ぶまで、旁くは天文・宗教・百家の書に及び、細かなるものは古今の人の爵里・姓氏・世次・年譜に至るまで、悉く記せざるは無し。至性沈摯、意氣真篤にして、人と交はること久しくして、要らず忘れず）」とある。

（5）此集 『倚声初集』のこと。王漁洋と鄒祗謨の共編。古今の詞話、及び、詞を集めたもの。昭代叢書本では、「倚声集」となっている。参考までに、王漁洋の序文を挙げておく。この序文は、順治庚子（一七〇一）季冬、広陵（江蘇省揚州市）の麴提閣にて書かれた。漁洋二七歳、揚州府推官として広陵に赴任した年の冬である。鄒祗謨の序文も同じ年に、広陵で作成されている。ただ、底本には、鄒祗謨の「菩薩蛮・詠青溪遺事画冊和阮亭韻」詞が収録されており、漁洋の原作は順治一八年三月以降に作られただろうこと、また、鄒祗謨の序文では、王士禎のことを「漁洋山人」と書いてあり、王士禎が「漁洋」の号を用いたのは順治一八年以降であることを考慮すると、序文の書かれた順治一七年には、『倚声初集』は出版されていないかつたかもしれない。蒋寅『王漁洋与康熙詩壇』（中国社会科学出版社、二〇〇一）「王漁洋与清詞之発軔」の注「15」に拠れば、『倚声初集』の出版は康熙元年

のこととされている。

甚矣、声音之道詎不大哉。古者歌詩三百、弦詩三百。意三百五篇之外可以被管弦、諧金石者、篇目猶衆、特其声弗伝耳。然予又考諸『史記』、古詩蓋三千餘篇、孔氏刪取三百五篇、皆弦歌以合「韶」「武」之音、則所謂歌弦之詩、殆即今所伝「閔雎」以下正變之詞、独歌弦之法不伝、而歌弦之詩固在也。「小雅」「南陔」・「白華」・「華黍」三篇、有其義而亡其辭。孔穎達以為此三篇在武王之時、周公制礼用為樂章、吹笙以播其曲。孔氏刪定有三百一十一篇、遭戰國及秦而亡。由是推之、則知三百一十一篇皆歌弦之文、乃其声自秦火而後、闕軼固已久矣。漢末、杜夔号嫺雅樂、而所得止「鹿鳴」・「騶虞」・「伐檀」・「文王」四篇、至太和中又失其三。左延年所得、僅「鹿鳴」一笙耳。夫師曠覩風而識盛衰、季札觀樂而知興廢、非声音之為道、何以感人如此其深耶。鄭樵考定漢魏以來樂府之詩、自「饒歌」・「鞞舞」而下、系之風雅、「郊祀」而下、系之頌聲。尼父之刪詩也、得詩而得声者、則列之風雅、得詩而不得声者、則置之逸詩。善讀詩者、由声以考義、而与聖人之志、庶幾其不遠矣。唐詩号称極備、『樂府』所載自七朝五十五曲之外、不概見。而梨園弟子所歌、率當時詩人之作、如王之渙之「涼州」、白居易之「柳枝」、王維「渭城」一曲、流伝尤盛。此外雖以李白・杜甫・李紳・張籍之流、因事創調、篇什繁富、要其音節皆不可歌。詩

之為功既窮、而声音之秘、勢不能無所寄、於是温・和生而『花間』作、李・晏出而『草堂』興、此詩之餘而樂府之變也。

詩餘者、古詩之苗裔也。語其正則南唐二主為之祖、至『漱玉』・『淮海』而極盛、高・史其嗣響也。語其變則眉山導其源、至稼軒・放翁而尽變、陳・劉其餘波也。有詩人之詞、唐蜀五代諸人是也。有文人之詞、晏・欧・秦・李諸君子是也。有詞人之詞、柳永・周美成・康与之之屬是也。有英雄之詞、蘇・陸・辛・劉是也。至是、声音之道乃臻極致、而詩之為功、雖百變而不窮。『花間』・『草堂』尚矣。『花菴』博而雜、『尊前』約以疎。『詞統』一編、稍撮諸家之勝、然詳於隆・万、略於啓・禎。鄒子与予蓋嘗歎之、因網羅五十年来薦紳・隱逸・官閭之製、彙為一書、統『花間』・『草堂』之後。使夫声音之道不至湮没而無伝、亦猶古歌弦之意也。書成、命曰『倚声』。陸游有言、「唐自大中後、詩家日趨淺薄。会有倚声作詞者。頗擺落故態、適与六朝跌宕意氣差近」。義取諸此。後之作、将由音声之微、以進求夫六義之正變、斯集也、可以興矣。

(甚しいかな、声音の道詎んぞ大ならずや。古へは詩三百を歌ひ、詩三百を弦す。意ふに三百五篇の外も以て管弦を被り、金石に諧ふべき者、篇目猶ほ衆きも、特だ其の声の伝はらざるのみ。然れども予又た諸れを『史記』に考するに、古への詩は蓋し三千

餘篇、孔氏三百五篇を刪取し、皆弦し歌ひて以て「韶」「武」の音に合はす、則ち所謂歌弦の詩とは、殆ど即今の伝ふる所の「関雎」以下正変の詞なり、独り歌弦の法のみ伝はらずして、歌弦の詩のみ固より在り。「小雅」の「南陔」・「白華」・「華黍」の三篇、其の義有りて其の辞亡し。孔穎達（おほもと）以為へらく此の三篇は武王の時に在りては、周公礼を制りて用て樂章を為り、笙を吹きて以て其の曲を播く。孔氏刪定して三百一十一篇有り、戦国及び秦に遭ひて亡はると。是れ由り之れを推せば、則ち三百一十一篇皆歌弦の文にして、乃ち其の声秦火自り而後、闕軼して固に已に久しきを知る。漢末、杜夔（とゑ）雅樂を嫺ふと号するも、而れども得る所は止だ「鹿鳴」・「騶虞」・「伐檀」・「文王」の四篇のみ、太和中に至りて又た其の三を失す。左延年の得る所は、僅かに「鹿鳴」の一笙のみ。夫れ師曠は風を覘（うかが）ひて盛衰を識り、季札は楽を觀て興廢を知る、声音の道たるに非ずんば、何を以てか人を感じしむること此くの如く其れ深からんや。鄭樵は漢魏以来の樂府の詩を考定して、「饒歌」・「鞞舞」自り而下、之れを風雅に系ぎ、「郊祀」より而下、之れを頌聲に系ぐ。尼父の詩を刪するや、詩を得てして聲を得たる者、則ち之れを風雅に列ね、詩を得てして聲を得ざる者、則ち之れを逸詩に置く。善く詩を読む者、声に由りて以て義を考すれば、而ち聖人の志と、庶幾ど其れ遠からじ。唐詩号して極

めて備はれりと称せらるるも、『樂府』の載する所七朝五十五曲自り外、概ね見えぬ。而して梨園の弟子の歌ふ所は、率ね當時の詩人の作なり、王之渙の「涼州」、白居易の「柳枝」、王維の「渭城」の一曲の如きは、流传すること尤も盛なり。此の外は李白・杜甫・李紳・張籍の流、事に因りて調を創るを以て、篇什繁富なりと雖も、要するに其の音節は皆歌ふべからず。詩の功たるや既に窮まるも、声音の秘、勢ひ能く寄する所無くんばあらず、是に於いて温・和（おと）生じて『花間』作り、李・晏（しげ）出でて『草堂』興る、此れ詩の餘にして樂府の変なり。

詩餘とは、古詩の苗裔なり。其の正を語れば則ち南唐二主もて之れが祖と為し、『漱玉』・『淮海』に至つて極盛、高・史（たかふみ）は其の嗣響なり。其の変を語れば則ち眉山其の源を導き、稼軒・放翁に至りて尽く變ず、陳・劉（ちんりゅう）は其の餘波なり。詩人の詞有り、唐蜀五代の諸人は是れなり。文人の詞有り、晏・欧・秦・李の諸君子は是れなり。詞人の詞有り、柳永・周美成・康与之の属は是れなり。英雄の詞有り、蘇・陸・辛・劉（しんりゅう）は是れなり。是に至りて、声音の道乃ち極致に臻る、而るに詩の功たるや、百変すと雖も窮まらず。『花間』・『草堂』は尚し。『花菴』は博くして難なり、『尊前』は約にして以て疎なり。『詞統』の一編は、稍や諸家の勝を撮るも、然れども陸・万（りくばん）に詳かにして、啓・禎（けいちん）に略なり。鄒子と予と蓋し嘗

て之れを歎ず、因りて五十年来の薦紳・隱逸・宮闈の製を網羅して、彙めて一書と為し、『花間』・『草堂』の後を續ぐ。夫の声音の道をして湮没して伝はる無きに至らざらしむるも、亦た猶ほ古への歌弦の意なり。書成り、命づけて『倚声』と曰ふ。陸游に言有り、「唐大中自り後、詩家日びに淺薄に趨く。会たま声に倚りて詞を作る者有り。頗る故態を擺落するは、適たま六朝の跌宕の意氣と差や近し」と。義此れより取る。後の作る者、將に音声の微に由りて、以て進んで夫の六義の正變を求めんとせば、斯の集や、以て興すべし。

(6)『花草蒙拾』 「蓋未及」以下の文章を見ると、幼稚で愚昧な者が、『花間集』・『草堂詩餘』を読む中で、感じ得たことを拾い集めた(書き溜めた)ものという意だろう。漁洋以前で、唐宋の詞を評論した詞論、または詞選に『花草』と名付けたものに、明・陳耀文の『花草粹編』二四卷がある。参考までに『花草粹編』の「提要」(『四庫全書總目提要』卷一九九)を挙げておく。

明・陳耀文編。耀文有『經典稽疑』、已著錄。是編採掇唐宋歌詞、亦間及於元人、而所採殊少。自序稱、「是集因唐『花間集』・宋『草堂詩餘』而起、故以『花草粹編』為名」。然使惟以二書合編、各採其一字名書已無義理。乃綜括兩朝之詞、而以『花』字代『唐』字、以『草』字代『宋』字、衡以名実、尤屬

未安。然其書摭摭繁富、每調有原題者、必錄原題。或稍僻者、必著採自某書。其有本事者、併列詞話於其後。其詞本不佳、而所填實為孤調。如縷縷金之類、則註曰備題。編次亦頗不苟。蓋耀文於明代諸人中、猶講考証之學、非嘲風弄月者比也。雖糾正之詳、不及万樹之『詞律』、選採之精、不及朱彝尊之『詞綜』、而裒輯之功、實居二家之前。創始難工、亦不容以後來掩矣。此本与『天中記』版式相同。蓋猶耀文旧刻。而卷首乃有延祐四年陳良弼序。刊刻拙惡、僅具字形、而其文則仍耀文之語。蓋坊賈得其旧版、別刊一序弁其首、以偽為元版耳。

(明・陳耀文編。耀文に『經典稽疑』有り、已に著錄す。是の編唐宋の歌詞を採掇し、亦た間ま元人に及ぶも、採る所殊に少し。自序に稱す、「是の集唐の『花間集』・宋の『草堂詩餘』に因つて起こす、故に『花草粹編』を以て名と為す」と。然れども惟だ二書を以て合編するのみならしめば、各おの其の一字を採りて書に名づくるは已に義理無し。乃ち兩朝の詞を綜括して、『花』字を以て『唐』字に代へ、『草』字を以て『宋』字に代へ、衡るに名実を以てするも、尤ほ未だ安ぜざるに属す。然れども其の書の摭摭繁富にして、每調原題有れば、必ず原題を録す(「西楼月、即春曉曲」といったもの。この場合、原題は「春曉曲」で、「西楼月」は別名ということになる)。或いは稍や僻なれば、必

ず某書より採るを著はす。其れ本事有れば、詞話を其の後に併列す。其の詞本より佳ならざるも、而れども填むる所実なれば孤調と為す。縷縷金の如きの類は、則ち註曰備題す。編次も亦た頗る苟にせず。蓋し耀文は明代の諸人の中に於いては、猶ほ考証の学を講ずるがごとくして、嘲風弄月の者の比に非ざるなり。糾正の詳は、万樹の『詞律』に及ばず、選択の精は、朱彝尊の『詞綜』に及ばずと雖も、而れども褻輯の功は、実に二家の前に居る。創始工なり難きも、亦た後來を以て掩はるるを容れず。此の本『天中記』の版式と相同じ。蓋し猶ほ耀文の旧刻のごとし。而れども巻首に乃ち延祐四年陳良弼の序有り。刊刻拙悪にして、僅かに字形を具ふるのみにして、其の文は則ち仍ほ耀文の語なり。蓋し坊賈其の旧版を得て、別に一序を刊んで其の首めに弁して、以て偽りて元版と為すのみならん。※「尤属」は、「猶是（なおこのようである）と解釈した。あるいは、「尤是（とりわけである）」と同義かもしれない。「属」は「是」の用例は、史書に多く見られる。恐らくは、裁判用語の「係」と同様の背景を持つ言葉であろう。

(7) 広為 広範囲で。多岐にわたって。あまねく。おおいに。

(8) 揚推 あれこれ比べた末に要点を挙げること。『莊子』徐無鬼篇に、「頡滑有実、古今不代、而不可以虧、

則可不謂有大揚推乎（頡滑にして実有り、古今代はらず、而して以て虧くべからず、則ち大いに揚推するもの有り」と謂はざるべけんや）」とある。また、晋・左思「蜀都賦」（『文選』卷四）に、「吾子豈亦曾聞蜀都之事歟、請為左右揚推而陳之（吾子豈に亦た曾て蜀都の事を聞かんか、請ふ左右の為に揚推して之れを陳べん）」とあり、晋・劉逵注に、「韓非』有揚推編。班固曰、『揚推古今、其義一也』（『韓非』に揚推編有り。班固曰く、『古今を揚推すれば、其の義は一なり』）」とあり、また、李善注に、「許慎『淮南子注』、『揚推、粗略也』」とある。

(9) 童蒙 幼稚で物事に疎いこと。愚かで無知なこと。『易』蒙卦に、「匪我求童蒙、童蒙求我（我より童蒙に求むるに匪ず、童蒙より我れに求む）」とあり、朱熹の『本義』に、「童蒙、幼稚而蒙昧」とある。また、『淮南子』俶真訓に、「皆欲離其童蒙之心、而覺視於天地之間、是故其德煩而不能一（皆其の童蒙の心を離れて、天地の間に覺視せんと欲す、是の故に其の德煩にして一なること能はず）」とある。

【訳文】

かつて、『花間集』と『草堂詩餘』を読み、時折、ふと気が付くことがあるたびに、覺書をしたためて、書き溜めたものが数十条にまで及んだ。鄒祗謨は、なんとしても、

この覚書を『倚声初集』の巻頭部分に、詞話の一つとして組み込こんで刊行するつもりでいたので、わたしは断ることもできず、出版を承諾した。この覚書に『花草蒙拾』という題名を付けたのは、そもそも、ちゃんとあれこれ調べて要点をまとめ上げるということもできていないのに、そのうえに、わたしの浅はかな見識を露呈してしまうのを恥ずかしく思ったからである。

【一】

弇州⁽¹⁾謂⁽²⁾「蘇・黄・稼軒⁽³⁾為詞之變体⁽⁴⁾」、是也。謂⁽⁵⁾「溫・韋⁽⁵⁾為詞之變体⁽⁶⁾」、非也。夫溫・韋⁽⁶⁾視⁽⁶⁾晏・李・秦・周⁽⁷⁾、譬賦有「高唐」・「神女」⁽⁸⁾、而後有「長門」・「洛神」⁽⁹⁾、詩有「古詩」・「錄別」⁽¹⁰⁾、而後有建安・黄初⁽¹¹⁾・三唐⁽¹²⁾也。謂之正始⁽⁴⁾則可、謂之變体則不可。

【書き下し文】

弇州^{えんしゅう}の「蘇・黄・稼軒を詞の變体と為す」と謂ふは、是なり。「溫・韋を詞の變体と為す」と謂ふは、非なり。夫れ溫・韋は晏・李・秦・周を視れば、譬へば賦に「高唐」・「神女」有りて、而る後に「長門」・「洛神」有り、詩に「古詩」・「錄別」有りて、而る後に建安・黄初・三唐有るがごときなり。之れを正始と謂ふは則ち可なるも、之れを變体と謂ふは則ち可ならず。

【注釈】

(1) 弇州 明・王世貞(一五二六—一五九〇)のこと。字は元美、号は弇州山人、太倉(江蘇省太倉県)の人。嘉靖二六年の進士。山東副使・南京刑部尚書などを歴任した。李夢陽・何景明ら「前七子」が主張した古文復興を継承発展させ、李攀龍らと共に「後七子」の一人として数えられる。しかし、晩年は、平淡な詩境に落ち着いた。『弇州山人四部稿』などがある。伝は、『明史』卷二八七に見える。

(2) 弇州謂 王世貞のこの論は、『弇州山人四部稿』卷一五二所収『藝苑卮言』附録一に見える。『花草蒙拾』に引用された文章は、大本のものと異なる。そこで、この引用に該当する王世貞の文章を全文挙げておく。

『花間』以小語致巧、『世説』靡也。『草堂』以麗字取妍、六朝險也。即詞号称詩餘、然而詩人不為也。何者、其婉變而近情也、足以移情而奪嗜、其柔靡而近俗也、詩蟬緩而就之而不知、其下也、之詩而詞非詞也、之詞而詩非詩也。言其業、李氏・晏氏父子・耆卿・子野・美成・少游・易安、至矣、詞之正宗也。溫・韋艶而促、黄九精而刻、長公麗而壯、幼安辨而奇、又其次也、詞之變体也。詞興而樂府亡矣、曲興而詞亡矣。非樂府与詞之亡、其調亡也。

(『花間』の氣配のような細かい語小語を以て巧を致すは、

『世説』の世説新語の裏れを汲むのである靡なり。『草堂』の麗字を以て妍を取る

は、六朝の陰なり(六朝の名残・六朝を継承したものの)。即ち詞は号して詩餘と称す、然り而して詩人は為らざるなり。何となれば、其の婉えん變へんにして情に

近きや、以て情を移して好みを養ふに嗜しみを奪えふに足り、其の柔靡にして俗に近きや、詩蟬せん緩えんにして之れに就くも知らず、其の下なるや、之れ詩にして詞たりて詞に非

ず、之れ詞にして詩たりて詩に非ざるなり。其の業能力・成果を言へば、南唐二主李氏・晏氏晏殊・晏幾道父子・耆卿柳永・子野晏殊・美成周邦彦・

少游秦观・易安李清照、至れり、詞の正宗なり。温庭筠・韋温庭筠艷韋莊にして促に、黄九精にして刻に、長公麗にして壮に、幼安

辨にして奇なるは、又た其の次なり、詞の変体なり。詞興りて樂府亡び、曲興りて詞亡べり。樂府と詞の亡ぶるに非ず、其の調の亡ぶるなり。

(3) 蘇・黄・稼軒 北宋の蘇軾・黃庭堅と、南宋の辛棄疾のこと。

(4) 変体 主流から外れたもの。非正統的なもの。王世貞は、正統的なものから、一段劣る体としてゐるが、一面では新風・新体として解釈してもよさそうである。この用語を解釈するうえで、参考になるのが梁・劉勰が『文心雕龍』の通變篇で主張する「通變」という概念である。『漢詩の事典』(松浦友久編、大修館書店、一九九九)七三七頁に載せる「通變」の解説が、「変体」を解釈する一助となりえるので、全文引用してお

く。

劉勰の『文心雕龍』『通變』篇に主張されている

文学の継承と革新についての理論。『通變』の語それ自体は、つとに『易経』『繫辞伝』上に、『化して之を裁る、之を變と謂ふ。推して之を行ふ、之を通と謂ふ』と見える。すなわち『変』とは、慣例を變更して新しく仕立てなおすこと。要するに革新。

『通』とは、慣例を推戴してそのまま行うこと。つまり継承。劉勰はこの概念を文学の制作に応用して、この『通變』の説を唱えたのである。このときの劉

勰は、表向きは客観的に、文学一般を論ずる立場を取っている。しかしながら、当時(南朝の宋・齊)、

頭著になりつつあった新奇を追い求める修辭主義的風潮を強く意識して、これに対して、一定の警告を

発したものである。漢代以来の詩經学を奉じる人々のような主張、すなわち過去の文学を不易の典型

として墨守する主張を退けながら、その一方で、當時の浮薄な風潮を批判する。劉勰はこのように、文

学における継承と革新の契機を見定め、両者の高次の統合の上にこそ勝れた文学は作られる、と考えるのである。この通變説は、劉勰の、よい意味で穩健

な文学観を示すものとなっている(松原朗執筆)。

王世貞が『藝苑卮言』附録で言う「変体」も、多分に「通變」の「変」の意義を含んでゐると見て良いだろう。

王世貞が蘇軾や辛棄疾といった新風の詞人たちを「正宗」

と見てゐることは、この「通變」の「変」の意義を含んでゐると見て良いだろう。

の「次」と評しているのは、彼が復古を主張して力強く格調高い詩を目指していたこと、「文は秦漢、詩は盛唐」（『明史』王世貞伝）というスローガンを発していたことを考えると、興味深いものがある。

(5) 温・韋 晩唐の温庭筠と韋莊のこと。

(6) 視 比較する。見比べる。『呂氏春秋』仲秋篇に、「量小大、視長短、皆中度（小大を量り、長短を視れば、皆度に中たれり）」とある。また、金・王若虚『滹南集』卷三五に、「且宋文視漢・唐百体皆異。其開廓横放、自一代之変（且つ宋の文は漢・唐の百体を視れば皆異なれり。其れ開廓横放として、自づから一代之変なり）」とある。

(7) 晏・李・秦・周 北宋の晏殊・晏幾道・李清照・秦觀・周邦彦のこと。

(8) 「高唐」・「神女」 「高唐賦」と「神女賦」（共に『文選』卷一九所収）。共に戦国時代の宋玉の作。

(9) 「長門」・「洛神」 前漢・司馬相如の「長門賦」

（『文選』卷一六）と三国・曹植の「洛神賦」（同前卷一九）のこと。

(10) 「古詩」・「録別」 後漢ころの作「古詩十九首」と前漢・李陵が蘇武に贈ったとされる送別詩のこと。

「録別詩」の名称は、明代頃に定着したもの（明・馮惟訥編『古詩紀』などはこの名称で収録している）。

(11) 建安 後漢の献帝の年号。一九六〜二二〇年三月まで。ここで、建安と言うのは、この時期に活躍した

曹操・曹丕・曹植親子と「建安の七子」、及び彼らの詩風を指す。建安の七子は、孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・応瑒・劉楨のこと。「建安体」の語は、南宋・嚴羽『滄浪詩話』詩体に見え、「漢末年号。曹子建父子及鄴中七子之詩」と注釈が施されている。「鄴中七子」とは「建安七子」と同じ。

(12) 黄初 三国・魏の文帝（曹丕）の年号。二二〇〜二二六年まで。ここでは、この時期に活躍した詩人、及び、その詩風を指す。「黄初体」の語も、『滄浪詩話』詩体に見え、「魏年号。与建安相接。其体一也（魏の年号なり。建安と相接す。其の体の一なり）」と注されている。この注に拠れば、「建安体」中の一派程度の意味であり、具体的な代表詩人や詩風はよく分からない。

(13) 三唐 初唐・盛唐・晩唐のこと。「三唐」という呼び方がいつごろから定着したかは定かではないが、唐代を上記の初・盛・晩の三期に分けるのは『滄浪詩話』詩体に見える。なお、『滄浪詩話』では中唐の代わりに、「大歷体」・「元和体」がある。現今のように、唐代の詩人を、時代とその詩風によって、初唐・盛唐・中唐・晩唐の四つに分けるのは、明の高標『唐詩品彙』に始まる。

(14) 正始 礼儀・法則に適った始まり。物事の最初と見做すのに相応しいもの。正統的なもの。王世貞が言う「正宗」と同義と見て良い。『穀梁伝』定公元年に、

「昭公之終、非正終也。定之始、非正始也（昭公の終りは、正終に非ざるなり。定の始まりは、正始に非ざるなり）」とある。また、王世貞『藝苑卮言』巻四に、「盧・駱・王・楊、号称四傑。詞旨華靡、同沿陳・隋之遺、骨氣翻翻、意象老境、超然勝之。五言遂為律家正始（盧・駱・王・楊、号して四傑と称す。詞旨華靡にして、同じく陳・隋の遺に沿ふも、骨氣翻翻とし、意象老境にして、超然として之れに勝れり。五言遂に律家の正始と為る）」とある。

【訳文】

王世貞が、「蘇軾・黃庭堅・辛棄疾の詞は、従来の詞らしからぬ詞の変体である」と評したのは、その通りである。しかし、「溫庭筠と韋莊の詞は変体である」と評したのは、間違っている。そもそも、溫庭筠と韋莊は晏殊・晏幾道親子、李清照・秦觀・周邦彥らと比べるなら、まず、宋玉の「高唐の賦」や「神女の賦」があつてこそ、後の司馬相如の「長門の賦」や曹植の「洛神の賦」があるようなものだし、また、「古詩十九首」や李陵の「録別詩」があつたればこそ、後に建安・黃初の詩や唐代の詩が生まれえた、というようなもので、まず溫庭筠と韋莊という婉約派の先駆けとなる模範がいたからこそ、後に晏殊や李清照、秦觀に周邦彥といった詞人たちが台頭してきたのである。つまり、溫庭筠と韋莊を正統の興りと見做すのは良いけれども、彼

らを変体と見做すのはよろしくないのである。

【二】

『花間』字法、最著意設色、異紋細艷、非後人纂組所及。如「淚沾紅袖艷」・「猶結同心苣」・「荳蔻花開趁晚日」・「画梁塵艷」・「洞庭波浪颭晴天」。山谷所謂「古蕃錦」者、其殆是耶。

【書き下し文】

『花間』の字法、最も意を設色に著け、異紋細艷にして、後人の纂組の及ぶ所に非ず。「淚紅袖を沾して艷ずましむ」・「猶ほ結ぶ同心の苣」・「荳蔻の花は開く晚に趁るの日」・「画梁の塵は艷し」・「洞庭の波浪晴天を颭かす」というが如し。山谷の所謂「古への蕃錦」なる者、其れ是れに殆からんか。

【注釈】

(1) 『花間』 『花間集』収録詞人を指す「花間詞派」のことをいっているのかもしれないが、「花間派」という呼称がいつごろから始まったのか、また、「花間」のみで「花間詞派」を指すのか判然としないので、ここでは、単に『花間集』収録の詞、程度の意味にとらえておく。

(2) 著意 心を砕く。いろいろ配慮して良い結果を導

くこと。『楚辞』九辯に、「罔流涕以聊慮兮、惟著意而得之（涕を流して以て聊か慮ること罔かれ、惟だ意を著けて之れを得ん）」とあり、朱熹の『集注』に、「著意、猶言著乎心、言存於心而不釈也（著意とは、猶ほ心を著くと云ふがごとし、言は心を存して釈かざるなり）」とある。

(3) 設色 彩色すること。転じて、使用する言葉に工夫を凝らし、事物を誇張して描写することを言う。清・陸以湑『冷廬雜識』卷二「黄少司馬」に、「情辞懇摯、不必以設色為工（黄少司馬琮の手紙）情辞懇摯にして、必ずしも設色を以て工と為さず」とある。

(4) 異紋細艶 織物の織り目が緻密で、その生地も鮮やかな紅色をして美しいこと。ここでは、『花間集』に収録される詞（異紋）が、織り目が緻密に織られていて、その紅色鮮やかな生地が輝いているかのように、構成が完璧で異彩を放っていることを形容している。

「異紋」は、『冊府元龜』卷一六九、帝王部に、「（後）晋高祖天福二年（九三七）……十月……是月吳越王錢元瓘進銀五千兩……吳越異紋綾一千疋」とあることから、美しい刺繍が施された織物を言うことが分かる。「細麗」は、緻密で紅く輝くさま、また、織り目が緻密で美しい紅色の織物。織物のほかに、風景などにも言う。中唐・元稹「和乐天重題別東楼」詩（元氏長慶集）卷二二に、「日映文章霞細麗、風驅鱗甲浪參差（日は文章を映じて霞細麗なり、風は鱗甲を駆りて

浪參差たり）」とあり、晚唐・皮日休「重題薔薇」詩（『全唐詩』卷六一五）に、「可憐細麗難勝日、照得深紅作淺紅（憐れむべし細麗日に勝ち難く、深紅を照され得て浅紅と作るを）」とある。また、敷衍して美女を言うこともある。皮日休「奉和魯望疊韻吳宮詞二首」其一（『全唐詩』卷六一六）に、「荒王將鄉亡、細麗蔽袂逝（荒王郷を將て亡ぼし、細麗袂を蔽ひて逝く）」とある。

(5) 纂組 精緻な織物。『管子』輕重篇に、「伊尹以薄之游女工文繡纂組、一純得粟百鍾於桀之国（伊尹薄「国名」の游女の文繡纂組に工なるを以て、一に純ら粟百鍾を桀の国より得たり）」とある。また、書物などを編纂すること。清・李斗『揚州画舫錄』卷一二「橋東錄」に、「纂組異聞、網羅軼事（異聞を纂組し、軼事を網羅す）」とある。ここでは、前者の意で、後世の人が織りなした詞、といった意味。

(6) 涙沾紅袖 艶 『花間集』卷一所収、晚唐・韋莊「長天長」詞中の句。「別來半歲音書絕、一寸離腸千萬結。難相見、易相別、又是玉樓花似雪。○暗相思、無處說、惆悵夜來煙月。想得此時情切、淚沾紅袖 艶（別來半歲音書絶え、一寸の離腸千万に結ぶる。相見ゆること難く、相別るること易し、又た是れ玉樓の花は雪に似たり。暗に相思ひて、処として説く無く、惆悵す夜來の煙月。想ひ得たり此の時情切にして、涙紅袖を沾して 艶^つずましめんことを）。「艶」は、汚れができること。

変色すること。ここでは、衣服に涙の痕がつくことをいう。

(7) 猶結同心苣 『花間集』卷四所収、前蜀・牛嶠「菩薩蠻」詞中の句。「緑雲鬢上飛金雀、愁眉斂翠春煙薄。香閣掩芙蓉、画屏山幾重。○窓寒天欲曙、猶結同心苣。啼粉汚羅衣、問郎何日帰（緑雲鬢上金雀飛び、愁眉翠を斂めて春煙薄し。香閣芙蓉を掩ざし、画屏山幾重。○窓寒くして天曙けんと欲するも、猶ほ結ぶ同心の苣。啼粉羅衣を汚し、郎に問ふ何れの日にか帰らんと）。「同心苣」は、松明の図案（格子柄）を縫い取りした織物。梁・沈約「少年新婚為之詠」詩（『玉台新詠箋注』卷五）に、「錦履並花紋、繡帶同心苣（錦履並花の紋、繡帶同心の苣）」とある。

(8) 荳蔻花開趁晚日 『花間集』卷六所収、後蜀・歐陽炯「南郷子」詞中の句。「袖斂絞綃、採香深洞笑相邀。藤杖枝頭蘆酒滴、鋪葵蓆、豆蔻花開趁晚日（袖は絞綃を斂め、香を深洞に採り笑ひて相邀ふ。藤杖枝頭蘆酒滴り、葵蓆を鋪く、豆蔻の花は開く晚に趁るの日）。「趁晚日」は、夕日のこと。「趁」は走る。ここでは、向かう、と解釈した。恐らく「趁晚」は、「向晚（晩に向とす）」と同義なのだろう。

(9) 画梁塵颺 『花間集』卷一〇所収、後蜀・毛熙震「後庭花」詞中の句。「鶯啼燕語芳菲節、瑞庭花發。昔時懽宴歌聲揭、管絃清越。○自從陵谷追遊歇、画梁塵颺。傷心一片如珪月、閑鎖宮闕（鶯啼き燕語る芳菲

の節、瑞庭花發く。昔時の懽宴歌聲掲がり、管絃清越なり。○陵谷ありて追遊歇みて自從り、画梁の塵は颺^{はら}なり。傷心一片珪月の如し、閑かに宮闕を鎖^{くわ}ざす）。ここの「颺」は、黄黒い、という意味。時間が経過した埃の様子を言ったもの。※「陵谷」は、陵が谷になり、谷が陵になることで、社会の変化するたとえ。「追遊」は、次々に名勝を尋ねあるくことで、ここでは、宮女が皇帝の催す宴席に侍ることを指す。

(10) 洞庭波浪颺晴天 『花間集』卷五所収、後唐・牛希濟「臨江仙」詞中の句。「洞庭波浪颺晴天、君山一点凝煙。此中真境属神仙。玉楼珠殿、相映月輪边。○万里平湖秋色冷、星辰垂影参然。橘林霜重更紅鮮。羅浮山下、有路暗相連（洞庭の波浪晴天を颺かし、君山一点の凝煙あり。此中の真境神仙に属す。玉楼珠殿、相映ず月輪の边。○万里の平湖秋色冷かに、星辰影を垂れて参然たり。橘林霜重なり更に紅鮮やかなり。羅浮山下、路の暗に相連なる有り）。※「洞庭」は、洞庭湖のこと。湖南省北部にある淡水湖。「君山」は、洞庭湖中にある小さな島。

(11) 山谷 黄庭堅、字は魯直、号は山谷道人、また、涪翁と号した。洪州分寧（江西省修水県）の人。治平四年（一〇六七）の進士。国子監教授・校書郎・秘書丞兼国史編修官を歴任。若い時から蘇軾の知遇を得て、「蘇・黄」と並称され、張耒・晁補之・秦觀と共に「蘇門四学士」に数えられる。『山谷集』がある。伝は、『宋

史『卷四四四に見える。

(12)
1) 古蕃錦

『山谷集』卷二九「跋王晋卿書」に、「余嘗得蕃錦一幅、团窠中作四異物、或無手足、或多手足、甚奇怪、以為書囊。人未有能識者。今觀晋卿行書、頗似蕃錦。其奇怪非世所學、自成一家（余れ嘗て蕃錦一幅を得、团窠の中四異物を作す、或いは手足無く、或いは手足多くして、甚だ奇怪なり、以て書囊を為る。人に未だ能く識る者有らず。今晋卿の行書を觀るに、頗る蕃錦に似たり。其れ奇怪にして世の學ぶ所に非ず、自づから一家を成す）」とある。※「王晋卿」は、北宋の王詵。字は晋卿。太原（山西省太原市）の人。開封に移り住んだ。諡は榮安。官は駙馬都尉・利州防禦使。詩書画に巧み。その堂を宝繪堂と言ひ、古今の名画を蔵していた。伝は『宋史』卷二五五に見える。「蕃錦」の「蕃」は「蛮」に通じ、「蕃錦」は外国製の布を指す。特に、蜀の地方で作られた珍しい模様様の布を言うらしい。「团窠」は、まるい穴状の模様。晩唐・韓偓の「後魏時、相州人作李波小妹、疑其未備、因補之」詩の陳繼龍注（陳繼龍註『韓偓詩註』学林出版社、二〇〇一）に、「蛮錦、即蜀錦」とあり、注に引く朱啓鈴『糸綉筆記』に、「自蜀通中原而織事西漸、魏晋以来蜀錦勃興、幾欲奪襄邑之席。於是襄邑乃一変而營織成、遂使錦綾專為蜀有（蜀自り中原に通じて織事西に漸み、魏晋以来蜀錦勃興し、幾んど襄邑の席を奪はんと欲す。是に於いて襄邑乃ち一変して織成を営み、

遂に錦綾をして専ら蜀有と為さしむ）」とある。以上のことから察するに、「古蕃錦」とは、奇抜で誰しもが真似できるようなものではない素晴らしさを言うの
だろう。

【訳文】

『花間集』に収録される詞は、とりわけ用語に工夫を凝らし、事物を誇張して描写することに心血を注いでおり、そうして織り成された詞は、あたかも織り目が精緻で紅色鮮やかな美しい織物が、異彩を放っているかのようであり、後世の人々が織りなした詞の光彩が霞んでしまうほどである。たとえば、韋莊の「涙が紅い袖を濡らして赤黒い涙痕を作る」、牛嶠の「まもなく夜が明けようというのに、まだ愛しい人との絆は解けぬものと妄信して、格子柄の布を織り続けている」、歐陽炯の「薄紅色の荳蔻の花が沈まんとする夕陽のなかに咲いている」、毛熙震の「かつてはきらびやかだったはずの梁にはほこりが積もって黄暗い色へと変色してしまっている」、牛希濟の「洞庭湖が風に吹かれて波立ち、晴天の日差しを反射して耀く」といった句などがそれぞれある。黄庭堅が王詵の書を評して言った「古えの蕃錦」というのが、それらの詞を評する言葉として妥当だろう。つまり、『花間集』の詞は、きらびやかで奇抜な異彩を放ち、容易に真似ることのできないものなのだ。

【餘説】

第二条を見るに、王漁洋は『花間集』に収録される詞の特徴が、用語に工夫を凝らした誇張表現を重視したものであると認識し、それが、後人の及ばないもの、つまり最高峰であると目しているようである。

中国文学の一般的な通念において、過度に修飾された詩文、あるいは、艶やかで女性的な詩文は、正道ではないと敬遠される傾向がある。しかし、第一条で、温庭筠らを先駆けとする晏殊・李清照ら婉約派を正道と見做し、蘇軾や辛棄疾ら豪放派と称される人々を変体としていたことから、王漁洋は、少なくとも詞においては『花間集』のような、用語に工夫を凝らしたものが正道であると認めていたことになる。

ところで、「著意設色（用語に工夫を凝らし、事物を誇張して表現することに心血を注ぐ）」とはどういったものなのか。具体例として挙げられた韋莊らの詞をもとに、私見を述べておく。

韋莊らの詞に用いられている言葉を見ると、「紅袖」・「同心苳」・「荳蔻」・「画梁塵」など、女性的で脆弱な印象を抱かせる言葉は用いられているが、華美に過ぎる言葉はない。これらの言葉を並べるだけでは、とても印象に残るような詞にはならないだろう。しかし、韋莊らは、これらの言葉が死なないように、動詞や形容詞の配置、選択に気を配って、嫌らしくない程度に句を修飾し、脆弱だった言葉に生氣を与えることに成功している。

もともと用語の巧妙さが際立つのは、毛熙震の「画梁塵颯」という句だろう。この一句は、わずか四文字しか用いられていない。「画梁塵」にたった一文字「颯」が加わっただけである。しかし、この一文字が加わっただけで、「画梁塵（美しい梁に積もる塵）」は、塵が黄黒く変色するまでの長い時間が経過したことを窺わせるのである。「塵」だけでも、ほこりが積もるほどの時間の経過を表現できるが、色を示す「颯」字を加えることで、梁が古びたというイメージはより具体的になり、「画梁塵」の三文字だけで表現するよりも、さらに長い時間経過したことが誇張されるのである。そのうえ、「画」と「颯」とが栄枯盛衰を端的に示しており、この対比が、もの悲しさを一層引き立てる効果をもたらしている。これらの効果を見ると、「颯」字を用いた、毛熙震の用字の工夫が分かる。

その他の引用について言及すれば、韋莊の「泪沾紅袖颯」は、「颯」字がアクセントとなっている。袖に落ちた涙の痕が色濃いということは、次から次に涙があふれて、なお涸れずにいることを示し、女性の悲しみも、この表現によって強調されている。牛嶠の「猶結同心苳」は、「猶」という字が、「同心苳」という言葉のイメージを最大限に活かしている。「猶」字が、愛しい人を待ち続ける時間の長さ、愛しい人を信じる気持ちの強さを、想起させる。

歐陽炯の「荳蔻花開趁晚日」は、「趁晚日」がアクセントとなつている。薄紅色の荳蔻の花は、沈みゆく夕陽に照らされて、一層紅く美しい様相を呈するのである。これは、

夕陽が沈むまでの限定された時間内の美を切り取った斬新な表現でもある。この表現を可能にしたのは、とりわけ「趁」字の貢献するところが大きいだろう。この「趁晩日（暮れに向かう太陽）」という表現は、恐らく詞が作られた当時は、奇抜な表現だったのではないだろうか。

さて、あまり目立った語のない牛希濟の「洞庭波浪颭晴天」だが、その中でもっとも目を引くのは「颭」字であり、この句の「設色」もこの字で間違いないまい。「颭」は、風が物を動かす、風によって波がたつことを意味する。しかし、この句には、すでに「波浪」の文字があるので、ここでは、単純に波が風によって生じたこと指しているわけではあるまい。恐らく、「颭晴天」とは、文字通り、風が晴れた空を動かしているのである。正確には、風によって生じた波が、湖面に映る空を動かし、降り注ぐ陽光を乱反射させ、耀く湖面という美しい景色を現出させているのである。「颭」字を「動」字に替えれば、同様の表現が可能になるが、やはり「颭」字を用いるところが、誇張的な表現につながる。「動」字では、単に波が湖面を動かしているというだけであるが、「颭」字を用いることで、風の吹いていることを強く意識させることになるのである。

以上のように、いずれの詞も、決して過度な修飾を施しているわけではない。「颭」や「猶」、「趁」や「颭」といった、何気ない一文字が、「紅袖」や「荳蔻」といった軟弱な言葉や、「波浪」、「晴天」といった平凡な言葉を、印象深いものになっているのだ。こうした工夫を凝らした字の

活用（字法）が、これらの詞に、字面にはない女性の心情や、夕陽や風といった自然の動きといった含蓄を持たせていると言える。

ここに挙げられた詞が、深い含蓄をもっていることは右に見たとおりである。こういった詞こそ、王漁洋が詩作の模範とした「象外之象」（晩唐・司空図「与極浦書」）・「韻外之致」・「味外之旨」（司空図「与李生論詩書」）を體現したものであると言っても過言ではないだろう。

【三】

「蟬鬢美人愁絶」⁽¹⁾、果是妙語⁽²⁾。飛卿「更漏子」⁽³⁾・「河瀆神」⁽⁴⁾、凡兩見之。李空同所謂「自家物、終久還来」耶⁽⁵⁾。

【書き下し文】

「蟬鬢の美人愁絶す」とは、果たして是れ妙語なり。飛卿の「更漏子」・「河瀆神」、凡て兩たび之れを見る。李空同の所謂「自家の物、終久還た來たる」ものならんか。

【注釈】

（1）蟬鬢美人愁絶 『花間集』卷一所收、温庭筠の「更漏子」詞・「河瀆神」詞中の句。

「更漏子」詞、「相見稀、相憶久、眉淺淡煙如柳。垂翠幕、結同心、侍郎燠繡衾。○城上月、白如雪、蟬鬢美人愁絶。宮樹暗、鵲橋橫、玉籤初報明（相見ゆるこ

と稀にして、相憶ふこと久し、眉は淺淡にして煙は柳の如し。翠幕を垂れ、同心を結んで、郎に侍つて繡衾を燠ず。○城上の月、白きこと雪の如く、蟬鬢の美人愁絶す。宮樹暗く、鵲橋横たはり、玉籤初めて明を報ず」。※「蟬鬢」は、蟬の羽のように薄く梳いた耳ぎわの髪の毛。転じて、美女を指すこともある。「愁絶」は、非常に悲しいという意。「絶」は、程度の甚だしいことを表す補語。「煙如柳」は、恐らく「柳如煙」の倒置で、柳のように細い腰つきを言う。「燠繡衾」は、ここでは、人の体温で蒲団を暖めること。「玉籤」は、時刻を告げるため、階段などに投げ入れた札（棒状のもの）。玉の札が、階段（石）に落ちると響くので、その音で時刻を報せた。前関（前段）の第四句から第六句までは、宮女が寵愛を受けていたころの回想だろう。後関は、寵愛を失って長い独り寝の悲しみを描写したものと解釈できる。

「河瀆神」詞、「河上望叢祠、廟前春雨來時。楚山無限鳥飛遲、蘭棹空傷別離。○何処杜鵑啼不歇、艷紅開尽如血。蟬鬢美人愁絶、百花芳草佳節（河上叢祠を望む、廟前春雨來たるの時。楚山限り無く鳥飛ぶこと遅し、蘭棹空しく別離を傷む。○何処の杜鵑ぞ啼ひて歇まざる、艷紅開き尽くして血の如し。蟬鬢の美人愁絶す、百花芳草の佳節に）」。※前関は、別れの場面ではなく、別れた後の場面を描いているのだろう。「楚山」とあることから、「祠」「廟」は、湘水の女神を祭った

ものと考えられ、愛しい舜帝と離れ離れになった女神のかつての境遇に女性が同情したものと考えられる。また、「叢祠」の「叢」字は生い茂った草、つまり、積みもり積もった思いを喻え、「鳥飛遲」とは、愛しい人からの手紙のないことを連想させる。これらのことから、「河瀆神」は全篇通して、孤独な女性を描写したものと考えられ、前関もまた、別離の後の描写と解釈することができるといえる。

(2) 果是 たしかに。まことに。かねてよりと思っていた。江戸・釈大典『文語解』巻一に、「果（はたして・かならず）、この字かねて言しごとく、かねて思しごとく、といふ辞なり。『若果立、必為季氏憂（若し果たして立たば、必ず季氏の憂ひと為らん）』（魯世家）、『夫子果肯終日正言、鞅之藥也（夫子果たして肯へて終日正言せば、鞅の藥とならん）』（商君伝）これなり。『始子言、郢未可入。今果何如（始め子言ふ、郢未だ入るべからずと。今果たして何如）』（伍子胥伝）、始にいひしごときか、いか、と難ずる辞なり」とある。釈大典の前二つの引用は、現在なら、いずれも、「もし」といった仮定の辞として認識できるが、ニュアンスとしては、「かねてから思っていたように」という言葉を補っても差支えないものだろう。また、伍子胥伝の用例も、現在なら「いったいどうであるか」といった疑問の強調として処理できそうだが、やはり、「以前言っていたとおりか、どうだ」と訳することが

できるだろう。『花草蒙拾』の「果是」も、「かねてから思っていたとおり、やはり」というニュアンスを持っていると考えて良いだろう。

(3) 妙語 うまく言葉にできないけれど、すばらしいと感じることば。評語として「妙」字が用いられたとき、「なんとなく良いと分かりはするが、うまく言葉にできない良さ」、「うまく言葉にできないけれど、言葉が発さずにはおれないすばらしさ」を表す。このことに関しては、朱自清氏に「『好』与『妙』」という論文がある(『文藝復興中国文学研究号』上冊、一九四八。後、『朱自清古典文学論文集』上海古籍出版社、一九八一に収録)。すこし長いが、朱自清氏の論文を引用しておく。

歴史上、「好」字の出現は、「妙」字よりも早い。『周易』中孚・九二爻辞に、「我れに好爵有り、吾れ爾と之れを靡くさん」とある。「好爵」は美しい杯のようだ。「靡」は「尽」と解釈できる。これは、一緒にこの杯に満たした酒を飲みほそうという意味だろう。『詩経』の中に「好」字はたくさん出てくる。ここでは、『詩経』から魏風「葛屨」中に見える「好人」を挙げることにする。この「好人」について、『毛伝』は、「好女手の人(美しい手の女性)」と解釈している。また、小雅「大田」中の「既堅既好」は、「百穀」について言ったもので、鄭玄は箋注で、「尽く堅熟し、尽く斉好す(すべてかたく熟し、き

れいに一様の形にとのつている)」と述べている。『説文解字』に拠れば、「好は、美なり。『女』『子』に従ふ」とあり、『方言』二にも、「凡そ美色あるもの、或いは之れを好と謂ふ」とある。『淮南子』修務篇に、「曼頰皓齒、形夸く骨佳く、脂粉芳沢を待たずして性の説ぶべき者は、西施と陽文なり(肌のきめ細かい美しい頬に白い歯、見た目もうるわしく、化粧を凝らしたり着飾ったりしなくとも、そのまの容姿で人を魅了する者は、西施と陽文である)」とあり、高誘の注に、「曼頰は、細理なり。夸は、弱なり。佳は、好なり。性は、猶ほ姿のごときなり。西施・陽文は、古への好女なり」とある。『文選』の「七発」と「辨命論」の注には、『説文』の著者許慎の『淮南子』注を引いて、「陽文は、楚の好人なり」とある。「好女」と「好人」は共に「美色(美しい様子)」が主要な意味となっている。また、『爾雅』釈言には、「称は、好なり」とある。「称」とは「勻称(ととのう)」ということである。聞一多先生は、「好」字の本来の意味は、まさしく「勻称」であると説いている。彼は次のように指摘している。『詩経』『兔置』の『公侯好仇』の『好仇』が、『太玄経』の内・初一では『嬰執』となっており、『經典釈文』に拠れば、これは『妃仇』であり、『好仇』でもある。ならば、『好』と『妃』とは、意味が同じで文字も通用しているのだ。そして、『爾雅』釈

詰には、『妃は、対なり』とあり、『妃仇』もしくは『好仇』は、『匹配（つれあい）』あるいは『配対』ということになり、『好』も『仇』も、『配』とか『対』という意味になる。『配（ならぶ）』も『対（ならぶ）』も、『勻称』ということである」と。この闡一多氏の論は、もう少し説を加えて補うことができそうだ。

「好」は、先に触れたように、「女」と「子」を合わせた会意文字である。宋の徐鍇の解釈に従えば、「子」は男子の美称であり、女と子（男）が一緒になつて、まさに夫婦となつたのである。それならば、「好」の本来の意味は、もしかしたら「配」か「対」であり、「勻称」は、「配」・「対」から派生した意味なのかもしれない。ともあれ、「好」にはもとより「勻称」という解釈があることが分かった。これによつて、「好爵」は、杯の形が均整のとれていることを示しており、「好女手」は、指先が整っていることを示しており、「美色」は、顔だちとスタイルのバランスが良いことを示していることが明白になった。「斉好」も、穀物の粒がみな等しいことを示している。こうした「好」は、見た目による審美的な評語であつて、見た目だけでは判断しきれない道徳的な評語ではない。

「妙」字は、『老子』から見えるようだ。『老子』の第一章に言う。

故に常に欲無きものは以て其の妙を觀、常に欲有

るものは以て其の微を觀る。此の兩つの者は同じきより出づるも而も名を異にす。同じきは之れを「玄」と謂ふ。玄の又た玄は、衆妙の門なり。

この一章は「道」について論じたものである。王弼注に、「妙とは、微の極みなり」とある。「微」字は、『經典釈文』に拠れば、「辺（境・限り）」という解釈がある。「道」は、「有欲」という面から見れば、有限であり、「辺際に着く（境界の果てに行きつく）」のである。「無欲」という面から見れば、これは「微の極み」であり、「微の極み」は無限と行うことが可能で、「辺際に着かざる（果てに行きつかない）」ものでもある。しかし、「妙」と「微」とは、共に「道」に含まれる性質であり、本は同じところから出ているのであつて、これを「玄」と呼ぶのである。『説文』には、「玄は、幽遠なり」とある。これは、『莊子』の所謂「混沌」であり、「漆黒一団（一筋の光も刺さない暗闇）」でもある。この「漆黒一団」が、実は「衆妙の門」である。これは、「正言反するが若し（正しい言葉はかえつて嘘のように聞こえる）」というものであり、『莊子』の所謂「端崖無きの辞（常識はずれの言葉）」でもある。つまり、よく理解できない話ということである。後、「玄妙」という熟語ができた。「玄」は「妙」であり、「妙」は「玄」であるので、熟語にして強調したのである。時代は下るが、『周易』の『説卦伝』にも「妙」字

が用いられている。

神なる者、万物に妙にして言を為す者なり。

晋の韓康伯注に、

此に於いて「神」と言ふ者は、八卦の運動、變化の推移を明らかにするも、之れをして然らしむる者有る莫し。神とは則ち無物なるに、「万物に妙にして言を為す」ものなり。

とあり、『繫辭伝』上に、「陰陽測られざるを之れ神と謂ふ」という一句があり、韓康伯注に、

神なる者、變化の極みなり。「万物に妙にして言を為す」とは、形を以て詰すべからざる者なり。

とあり、唐の孔穎達の『正義』に、

妙は微妙を謂ふなり。万物の体に変象の尋ぬべき有り。神とは則ち万物に微妙にして言を為すものなり。尋求すべからざるを謂ふなり。

とある。『説卦伝』及び韓康伯と孔穎達は、道家の学説の影響を受けており、「神」を「之れをして然らしむるもの有る莫し（万物に変化を与えているのに、直接手を下しているものの実態がない）」と説明している。これは自然ということである。「無物」とも説かれ、「形を以て詰すべからず（形を明らかにすることができない）」とか、「尋求すべからず（究明することができない）」とも説かれる。この「神」こそ、実は「道」であり、「妙」でもある。後、「神妙」という熟語もできた。まさに自然に生まれた言

葉である。

『莊子』寓言篇に、次のような故事が見える。

顔成子游、東郭子綦に謂ひて曰く、

「吾れ子の言を聞きて自り、一年にして野、二年にして従ひ、三年にして通じ、四年にして物たり、五年にして来たり、六年にして鬼入り、七年にして天成り、八年にして死を知らず、生を知らず、九年にして大妙なり」と。

晋の郭象注に、

妙は、善なり。善惡同じきが故に、往くとして冥ならざるは無し。此に言は、久しく道を聞き、天籟の自然を知り、将に忽然として自ら忘れんとすれば、則ち穢累日びに去り、以て尽くるに至るのみ。

とある。唐の成玄英の注疏には、「妙は、精微なり」とあり、また、「知照宏博なるが故に、『大』と称するなり」と言う。この故事は、「妙」が自然に基づいていることを強調した。郭象が「妙」を「善」と解釈しているのは、「往くとして冥ならざるは無し（どこまでいってもはつきりしない）」ということを重視しているからであり、「善惡同じ」というのは、善惡の分別を「忘れた」ということなのである。成玄英は「妙」を「精微」と解釈した。これは、「知照宏博（見識豊か）」であったからこそ、「精微」という境地に到達しえたのである。「精妙」という熟

話もできた。「妙」と「眇」とは通じている。『莊子』徳充符篇に「眇乎として小なるかな」という一句がある。このことから、「妙」は「小」とか「微」という意味を含んでいることが分かる。この「妙」は自然に基づいたもので、予測ができず、「尋求すべからず」、「形を以て詰すべからず」というものである。また、「道の道ふべきは、常の道に非ず（説明することができざる道は、不変的な道ではない）」と言うが、「妙」も説明できないものである。しかし、求めることはできなくとも、偶然出会うということには往々にしてあるものだ。「忽然として自ら忘る（自我がふと意識からはずれる）」ことによつて「九年にして大妙」となり、「久しく道を聞く」ことによつて「自ら忘る」という状態になったのである。どんなに尽力したところで結局言葉にすることはできないのだけれども、それでも、「道ふべき道（言葉にできるもの）」によつて言葉にすることを試みなければならぬ。

——中略——

きつちり理解することに労力を費やすことがないからこそ、「妙にして言ふべからず（妙としか言えない）」という言葉が出てくるのだ。そもそも、『莊子』外物篇ですでに「意を得て言を忘る」と述べているが、「言を忘る」と言っているのだから、「言ふべからず（言葉にできない）」というわけでもないのだ。

……「妙にして言ふべからず」の「妙」は、言外（言葉では表現できないところ）にある。言外にある「妙」は、「妙解」「妙覚」「妙悟」によつて心中に会得するほかないのである。このように会得される「妙境」は、「象外の境」とか「象外の妙」とも呼ばれる。

（從歷史上看、「好」字的出現比「妙」字早些。『周易』中孚・九二爻辭說、「我有好爵、吾与爾靡之」。「好爵」似乎是好看的酒盃、「靡」作「尽」解、這裏就是共尽這盃酒的意思罷。『詩經』裏「好」字很多、我只消舉出「魏風・葛屨」篇中的「好人」、『毛伝』解做「好女手之人」、還有「小雅・大田」篇的「既堅既好」、指的是「百穀」、鄭玄『箋』、「尽堅熟矣、尽齐好矣」。拋『說文』、「好、美也。從『女』『子』」、「方言」二也說、「凡美色、或謂之好」。『淮南子』修務篇、「曼頰皓齒、形夸骨佳、不待脂粉芳沢而性可說者、西施・陽文也」。高誘注、「曼頰、細理也。夸、弱也。佳、好也。性、猶姿也。西施・陽文、古之好女」。『文選』「七發」和「辨命論」的注引『說文』著者許慎的『淮南子』注、「陽文、楚之好人也」。「好女」和「好人」都以「美色」為主。而『爾雅』釈言說、「称、好也」。「称」就是「匀称」。聞一多先生說「好」字的本義正是「匀称」。他指出『詩經』「兔置」篇「公侯好仇」的「好仇」、『太玄經』内初一作「嬰執」、拋『經典釈文』、就是「妃仇」、也就是「好

仇」。那麼、「好」跟「妃」義同字通。而『爾雅』釈詁說、「妃、对也」、「妃仇」或「好仇」就是「匹配」或「配对」、「好」和「仇」都是「配」或「对」的意思。「配」或「对」也就是「匀称」。這裏似乎可以更进一步、「好」既然從「女」和「子」会意，照宋徐鍇的解釋、「子」是男子的美称、女和子相配正是一对兒。那麼、「好」的本義也或就是「配」或「对」、而「匀称」是從「配」或「对」引申出來的。無論如何、知道了「好」原有「匀称」的解釋、就明白「好爵」指的爵形匀称、「好女手」指的手指匀称、「美色」指的顔色和形体的匀称。「齐好」也是指的穀粒匀称。這種「好」還只是審美的評語、不是道德的評語。

「妙」字似乎到『老子』中才見。『老子』第一章裏說。

故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其微。此兩者同出而異名、同謂之「玄」。玄之又玄、衆妙之門。

這一章是論「道」的。王弼注、「妙者、微之極也」。「微」字拠『經典釈文』有「辺」的解釋、從「有欲」一面看、就有辺兒、就「着辺際」。從「無欲」一面看、是「微之極」、「微之極」可以說是沒有辺兒、也就「不着辺際」。可是「妙」和「微」是「道」的兩面、本是一物、這個物又叫做「玄」。『說文』、「玄、幽遠也」、就是『莊子』裏所謂「混沌」、也就是「漆黑一团」。這「漆黑一团」却是「衆妙之門」。這是「正言若反」、也是『莊子』裏所謂「無端崖之辭」、就是

摸不着頭腦的話。後來「玄妙」變成了一個連語、「玄」就是「妙」、「妙」就是「玄」、連在一起是強調。『周易』的『說卦伝』出現得很晚、其中也用了「妙」字。

神也者、妙万物而為言者也。

晉韓康伯注、

於此言「神」者、明八卦運動、變化推移、莫有使之然者、神則無物、「妙万物而為言」也。

『繫辭伝』上有、「陰陽不測之謂神」一句話、韓康伯注、

神也者、變化之極、「妙万物而為言」、不可以形詰者也。

唐孔穎達『正義』、

妙謂微妙也。万物之体有變象可尋、神則微妙万物而為言也、謂不可尋求也。

『說卦伝』以及韓注、孔疏都接受了道家學說的影響、將「神」說成「莫有使之然」、就是自然、又說成「無物」、「不可以形詰」、「不可尋求」。這個「神」其實就是「道」、也就是「妙」。後來「神妙」也成了一個連語、正是出於自然。

『莊子』寓言篇說了一個故事。

顏成子游謂東郭子綦曰、

「自吾聞子之言、一年而野、二年而從、三年而通、四年而物、五年而來、六年而鬼入、七年而天成、八年而不知死、不知生、九年而大妙」。

晉郭象注、

妙、善也。善惡同、故無往而不冥。此言久聞道、知天籟之自然、將忽然自忘、則穢累日去、以至於尽耳。

唐成玄英疏却說、「妙、精微也」。又說「知照宏博、故稱『大』也」。這個故事更強調了「妙」的出於自然。郭氏用「善」來解「妙」、重在「無往而不冥」、「善惡同」是「忘」了善惡區別。成氏用「精微」來解「妙」、惟其「知照宏博」、才達到了「精微」的地步。「精妙」也成了一個連語。「妙」與「眇」通、『莊子』德充符篇有「眇乎小哉」的一句、可見「妙」是含有「小」或「微」的意義的。這個「妙」出於自然、不可測、「不可尋求」、「不可以形詰」。而、「道可道、常非道」、「妙」也是不可道的。可是雖然不可求、却未嘗不可遇、「九年而大妙」由於「忽然自忘」、「自忘」由於「久聞道」。雖然終於不可道、還得從「可道」的「道」入手。

——中略——

因為並不在乎摸着頭腦、所以才有「妙不可言」這句話。『莊子』外物篇本來已經說了「得意而忘言」、但是「忘言」還不是「不可言」。……「妙不可言」、「妙」在言外。言外的「妙」、只有在「妙解」「妙覺」「妙悟」裏心領神會。這樣領會「妙境」、又叫做「象外之境」或「象外之妙」。

(4) 飛卿 晚唐・溫庭筠（八一—？／＼八六六）のこと。

原名は岐、字は飛卿、太原（山西省并州市）の人。科挙には及第せず、国子助教で終わった。同時期の李商

隠と共に「温・李」と並称された。腕組みを八回するうちに、八韻（一六句）の詩ができたので、「温八叉」とも呼ばれる。著に『温飛卿詩集』がある。『花間集』には、六六首の詞が収録されており、唐代を代表する詞人。伝は、『旧唐書』卷一九〇・下に見える。

(5) 更漏子 詞牌名。別に「無漏子」・「独倚楼」・「付金釵」・「翻翠袖」とも言う。更漏は、水時計。温庭筠がこの調子を使つて更漏を詠じたので、この調子に「更漏子」という名前が定着した。なお、夏承燾『唐宋詞欣賞』二二頁に拠れば、「子」字は、「曲子」の略称で、歌という意味らしい。※詞は調子にあわせて歌われていたので、まず調子（メロディ）が存在する。この調子を「詞牌」と言う。詞牌には、それぞれ字数・平仄・押韻箇所が決まっており、その詞牌の調子に従つて文字を填めていくので、詞のことを「填詞」とも言う。

(6) 河瀆神 詞牌名。もともと、唐の教坊（宮中の音楽機関。音楽の専門家を養成していた）で歌われていた曲名で、後に詞牌の名となった。宋・黄昇『花菴詞選』卷四、李珣の「巫山一段雲」題下注に、「唐詞多緣題所賦。……『河瀆神』則詠祠廟（唐詞題に縁りて賦する所多し。……『河瀆神』は則ち祠廟を詠ず）」とあるので、主に神を祭る場所を詠じる時に用いられた調子らしい。

(7) 李空同 明・李夢陽（一四七二—一五二九）のこと。字は天賜、または献吉、号は空同子・空同山人、

諡は景文。号の空同は、嵯峨と表記されることもある。慶陽（甘肅省慶陽県）の人。弘治六年（一四九三）の進士。明代古文辞派の領袖で、何景明と共に「李・何」と並称される。また、「前七子」・「弘正の四傑」・「明の四大家」に数えられる。『空同集』がある。伝は、『明史』卷二八六に見える。

（8）自家物終久還来 明・曹臣（字は蕤之）『舌華錄』卷一・慧語第一に、「李嵯峨作詩、一句不工、即棄去不録。何大復深惜之。李曰、『自家物、終久還来』（李嵯峨詩を作り、一句工ならざれば、即ち棄去して録せず。何大復深く之れを惜しむ。李曰く、『自家の物、終久還来たらん』と）」とある。これに拠れば、「自分自身の言葉なら、敢えて記録などしなくとも、それは自分の物なのだから、最終的には、また自分の口頭にもどってくるだろう（再び口頭から発せられるだろう）」といった意味になろう。「自家」は、自分という意味。「終久」は、「畢竟」と同義で、結局は、所詮、といった意味になる。

【訳文】

「うすく梳いた鬢髪の美しきひとが悲しみに呉れている」というのは、まったくもって絶妙なことばである。温庭筠の「更漏子」と「河瀆神」、併せて二回、このことばを確認することができる。これは、李夢陽の言う「自分の物は、

結局、自分のもとに戻ってくる」ということなのだろうか。

【四】

「竹枝」⁽¹⁾ 泛詠風土。詠本⁽²⁾意者、止見田藝衡⁽³⁾「白玉蘭干護竹枝」⁽⁴⁾四首耳。卓珂月⁽⁵⁾以為正格⁽⁶⁾、要亦不必⁽⁸⁾。

【書き下し文】

「竹枝」は泛^{あまね}く風土を詠ず。本意を詠ずるは、止^ただ田藝衡⁽³⁾の「白玉の蘭干竹枝を護る」の四首を見るのみ。卓珂月⁽⁵⁾以て正格と為すも、要するに亦た必^{ひつ}ならず。

【注釈】

（1）竹枝 竹枝詞。主に、土地の風俗を詠じる時、この題を用いることが多い。中唐の劉禹錫が、建平（四川省）を訪れた時、その地方の民謡（巴・歌Ⅱ竹枝）を聞き、それに触発され、さらに自身が沅湘の間（湖南省）に左遷されていることと、屈原が同じ地方に左遷されていたことに感じたのか、「九歌」制作の背景にならって、自身も「竹枝詞（竹枝歌の歌詞）」を作り、歌のうまい女性に歌わせたことで、有名となった。屈原の「九歌」制作背景は王逸注に見え、それによると、楚の地方の祭りで歌われていた歌が粗野で田舎びていたので、新しい歌詞を作ったというもの。劉禹錫も、歌に触発されたものの、元歌の歌詞が粗野で田舎

びていたので新しく歌詞を制作したのである。なお、『新唐書』及び『樂府詩集』解題では、「竹枝詞」制作時期を湖南省に左遷されている時だとしているが、これは屈原の名前に引きずられた誤解で、本当は四川省に左遷されている時に制作されたらしい（村上哲見『三体詩（一）』一九七八、朝日新聞社、二二二頁）。ここでは、とりあえず『樂府詩集』の解題をもとに解説しておいた。宋・郭茂倩『樂府詩集』卷八一・解題の原文を挙げておく。

「竹枝」本出於巴渝。唐貞元中、劉禹錫在沅湘、以俚歌鄙陋、乃依騷人「九歌」作「竹枝」新辭九章、教里中兒歌之。由是盛貞元・元和之間。禹錫曰、「『竹枝』、巴歛也。巴兒聯歌、吹短笛、擊鼓以赴節。歌者揚袂睢舞、其音協黃鐘羽。末如吳聲、含思宛轉、有淇濮之艷焉」。

（「竹枝」は本と巴渝〔歌〕より出づ。唐の貞元中、劉禹錫沅湘に在りしとき、俚歌の鄙陋なるを以て、乃ち騷人の「九歌」に依りて「竹枝」新辭九章を作り、里中の児をして之れを歌はしむ。是れ由り貞元・元和の間に盛んなり。禹錫曰く、「『竹枝』は、巴歛〔歌〕なり。巴兒聯なつて歌ひ、短笛を吹き、鼓を撃ちて以て節を赴ふ。歌者は袂を揚げ舞を睢にし、其の音は黄鐘の羽に協ふ。末は吳声の如く、含思宛轉として、淇濮の艷有り」と）。

（2）本意 本来の意味。ここでは、題名通りの意味、

ということ。「詠本意」とは、「竹枝詞」は、本来風俗を詠じるものなのに、題名通り「竹枝」を主軸として作詞している、ということ。村上哲見『李煜』（中国詩人選集一六、岩波書店、一九五九）の「解説」の中（一五頁）に、「ときに詞牌と詞の内容とが一致しているものもあるが、これを『本意』という」と述べている。田藝衡の詞中の「竹枝」は、身持ちの堅い女性に喩えられている。

なお、王漁洋は別の著書でも「竹枝詞」について論じている。

唐人「柳枝詞」專詠柳、「竹枝詞」則泛言風土、如楊廉夫「西湖竹枝」之類。前人亦有一二專詠竹者、殊無意致。宋葉水心又勑為「橋枝詞」。亡友汪鈍翁編修亦擬作二首。其一云、「郎行時節橋花零、南風吹來香滿庭。今年橋実大如斗、勑郎莫羨楚江萍」。（『香祖筆記』卷三）

（唐人の「柳枝詞」専ら柳を詠ずるも、「竹枝詞」は則ち泛く風土を言ふ、楊廉夫の「西湖竹枝」の如きの類なり。前人亦た一二専ら竹を詠ずる者有り、殊に意致無し。宋の葉水心又た勑めて「橋枝詞」を為る。亡友汪鈍翁編修も亦た擬ひて二首を作る。其の一に云ふ、「郎行きし時節橋花零ち、南風吹き来たりて香庭に満つ。今年橋実大なること斗の如し、郎に勑む楚江の萍を羨む莫かれ」と）。『香祖筆記』の記述を見ても、「竹枝詞」はあくまで

風俗を詠じるもので、竹ばかりを描写するのは、「殊無意致（まったく面白みがない）」と、王漁洋は認識していたことになる。

(3) 田藝蘅 明・田藝蘅、字は子秬、錢塘の人。田汝成の子。磊落な性格で、酒を好み、任侠の徒と交際した。南曲の小令を作るのが得意だった。晩年、推薦によつて、新安博士となったが、辞めて帰郷した。著に、『留青日札』・『香宇集』などがある。伝は、『明史』卷二八七に見える。

(4) 白玉の句 田藝蘅『香宇初集拾遺』に見える。四首全て挙げておく。

其一

阿娘拘束好心痴 阿娘 拘束す 好心の痴なるを
白玉闌干護竹枝 白玉の闌干 竹枝を護る
春氣到来抽乱笋 春氣 到来すれば 笋を抽き乱し

石頭縫裏出芽兒 石頭縫裏 芽兒を出ださん

(可愛らしい娘さん、恋への好奇心を抑えてる。美しき玉の手すりか竹の子かぐや姫を護ってる。でも、春の氣配がやって来さえすれば、竹の子の芯をかき乱して、硬い石の間から芽を息吹かせることだらう)。

其二

姉妹猜疑不肯容

姉妹 猜疑して 容るるを肯がえん

投桃報玖又成空

投桃 報玖きやう 又た空くうと成る

竹竿引水非難事

竹竿 水を引くは 難事に非ず

一節通時節節通

一節通ずれば 節節通ず

(愛らしいお嬢さん、わたしを警戒して、なかなか心を許してくれない。贈り物も随分貢いで、すつからかんだというのに。まあ、竹の子に水を遣るのは、なんら苦ではないさ。一度水が通れば、次々に通じるものさ。そう、かぐや姫も一度心を開けば、わたしの色に染まるんだ)。

其三

若個郎来討竹秧

若個いづくの郎か来たりて竹秧ちやうを討ぬ

雌雄須得要成双

雌雄 須らく得てして双と成ら

んと要すべし

明年此日春雷発

明年の此の日 春雷発せば

管取嬰兒脱錦腔

管取 嬰兒の錦腔を脱せんことを管取す

(どこの色男が竹の子かぐやを求めて来たのか。男と女が番いとなるのは至極当然のこと。来年のこの日、春の稲妻、恋の稲妻、カッと走ったなら、愛しい竹の子ちゃん、その身を土より出して、ま白い綺

麗な体を披露してくれること請け合い。

其四

三径難開小院深
忍教独竹不成林

三径 開き難くして 小院深し
独竹をして林と成らざらしむる
に忍びんや

何如憔悴柯亭上

何ぞ如かんや 柯亭の上に憔悴
し

也得中郎一賞音

也た中郎を得て 一たび音を賞
せしむるに

(竹の子隠れるその小路、鬱蒼として足を踏み入れ
がたい、かぐやの庭。ああ、独り身の竹を、竹林と
させずに枯らせて良いものか。女として生まれたな
ら、子を育むことも幸せと知る。寂しい庭で枯れ散
るよりは、柯亭の垂木となつて屋根を支え、蔡中郎
「邕」に一時でもその美しさを称賛されるほうがよ
いはずだ。さあ、わたしを受け入れて、しつぱり濡
れようではないか)。

(5) 卓珂月 明・卓人月のこと。字は珂月、浙江仁和
(浙江省杭州市)の貢生。著に『蟾台集』・『蕊淵集』
などがある。徐士俊との編著に『古今詞統』があり、
王漁洋と鄒祗謨の『倚声集』はこの『古今詞統』の後
継として編纂された。戯曲家としても有名。簡単な伝
が、王漁洋の『感旧集』巻八に見える。

(6) 以為正格 「正格」は、正しいスタイル。卓人月
がどこで田藝衡の「竹枝詞」を「正格」と見做したの
かは、未詳である。『古今詞統』巻二に、古今の「竹
枝詞」を集めているが、田藝衡は「西湖竹枝」一首し
か採録されていない。なお、『古今詞統』には、卓人
月と徐士俊の詞を収めた『徐卓晤歌』が附録されてお
り、卓人月の「竹枝詞」は、「秦淮竹枝」が四首、「東
吳竹枝」が三首収録されている。

(7) 要 しかし。逆接の語。王鏐『詩詞曲語辭例釈(第
二次増訂本)』(中華書局、二〇〇五、三四二頁)に、
詳しい記述がある。『例釈』の引用する例文を挙げる。
中唐・韋応物「有所思」詩、「繚繞万家井、往来車馬
塵。莫道無相識、要非心所親(繚繞す万家の井、往来
す車馬の塵。相識無しと道ふ莫きも、要するに心の親
しむ所に非ず)」。宋・張文潜「贈江瞻道」詩、「嗟君
如美玉、外徹中乃厚。埋藏困塵埃、要以不可垢(嗟あ
君美玉の如し、外徹^{とと}つて中乃^{ちゅう}厚し。埋藏せられて塵
埃に困^くしむも、要するに以て垢^{けが}るべからず)」。

(8) 不必 確かではない。肯定できない。信頼できな
い。『漢書』卷三四・韓信伝に、「楚以亡龍且、項王恐、
使盱眙人武涉往説(韓)信曰、『足下何不反漢与楚。
楚王与足下有旧故、且漢王不可必。身居項王掌握中数
矣、然得脱、背約、復撃項王。其不可親信如此(以下
略)』(楚龍且を亡ふを以て、項王恐れ、盱眙の人武涉
をして往きて信を説かしめて曰く、『足下何ぞ漢に反

して楚に与せざる。楚王と足下とに旧故有り、且つ漢王必すべからず。身項王の掌握の中に居ること数しばするも、然れども脱するを得て、約に背き、復た項王を撃つ。其の親信すべからざること此くの如し（以下略）』とある。また、王漁洋『古夫于亭雜錄』卷

一に、「同年汪鈍翁晚刻『類稿』、字画多用古文、時人亦有效之者。宋景文云、『吾友楊備得『古文尚書釈文』、讀之大喜。於是書訊刺字皆用古文。僚友多不之識、指為怪物』。要之、亦有所不必也（同年汪鈍翁晚に『類稿』を刻す、字画多く古文を用ふ、時人も亦た之れを效ふ者有り。宋景文云ふ、『吾が友楊備『古文尚書釈文』を得、之れを讀みて大いに喜ぶ。是に於いて書訊刺字皆古文を用ふ。僚友之れを識らざるもの多し、指して怪物と為す』と。之れを要するに、亦た必ならざる所有るなり）」とある。韓信伝の用例は、信頼できない、という意味。『古夫于亭雜錄』の用例は、肯定できない・無理を押してまでする（做う）べきものではない、という意味。

【訳文】
「竹枝」は、おおむね土地の風俗を描写するものである。専ら題名通りの竹ばかりを描写する「竹枝詞」は、田藝蘅の「白玉の闌干竹枝を護る」という「竹枝詞四首」しか、わたしは知らない。卓人月は、田藝蘅の「竹枝詞」こそ正

しい詠みぶりだと解釈しているが、専ら竹を主軸に詠じているものが田藝蘅のものしかないもので、その考えは決して肯定できるものではない。

【餘説】

この文章、清・沈辰垣・王奕清編『御選歷代詩餘』卷一二〇にも収録されていて、若干口調が異なっている。しかし、第四条の文章の意図をより噛み砕いた内容となっているので、参考までに『御選歷代詩餘』の文章も挙げておく。

古今「竹枝」皆泛詠風土。惟田藝蘅云、「阿娘拘束好心痴、白玉闌干護竹枝。春色到来抽乱笋、石頭縫裏迸芽兒」、「若個郎来討竹秧、雌雄須得要成双。明年此日春雷発、管取嬰兒脱錦腔」、共四首、皆賦本意。蓋倣「楊柳枝」・「采蓮曲」体也。卓珂月以為正格、要亦不必。花草蒙拾。

（古今の「竹枝」皆泛く風土を詠ず。惟だ田藝蘅のみ云ふ、「阿娘拘束す好心の痴なるを、白玉の闌干竹枝を護る。春色到来すれば笋を抽き乱し、石頭縫裏芽兒を迸はなきいださん」、「若個の郎か来たりて竹秧を討ぬる、雌雄須らく得てして双と成らんと要すべし。明年の此の日春雷発せば、嬰兒の錦腔を脱せんことを管取す」と、共に四首、皆本意を賦す。蓋し「楊柳枝」・「采蓮曲」に倣ふの体ならん。卓珂月以て正格と為すも、要するに亦た必ならず）。

先に見た第一条の、溫庭筠らの詞を変体と見做さず、正始と見做すべきという議論からも分かるように、王漁洋は基礎を大事にし、また、王道を好む人であつたようだ。だからこそ、「竹枝詞」本来の特徴がない田藝蘅の「竹枝詞」を、正統なものとする意見に反対しているのだろう。王漁洋は、これと似たような議論を他でも提出している。

次に挙げるのは、漁洋が王昭君を詠じた詩について論じたものである。

高季迪、明三百年詩人之冠冕。然其「明妃曲」云、「君王莫殺毛延寿、留画商岩夢裏賢」。此三家村学究語。所謂「下劣詩魔」。不知季迪何以墮落如此。而盲者反以為警策。其後有彭三吾者、又云、「画師休尽殺、夢弼要人図」。転入魔道矣。又胡虚白「詠緑珠」云、「枉費明珠三百斛、荊釵那及嫁梁鴻」。郎瑛称之。皆所云「痴人前不得説夢」也。若永叔「耳目所及尚如此、万里安能制夷狄」、所謂詩論、亦自近腐。〔香祖筆記〕卷一）

（高季迪、明三百年の詩人の冠冕たり。然れども其の「明妃曲」に云ふ、「君王殺す莫かれ毛延寿、画を留む商岩夢裏の賢に」と。此れ三家村学究の語なり。所謂「下劣詩魔」なり。知らず季迪何を以てか墮落すること此くの如き。而れども盲者反つて以て警策と為す。其の後に彭三吾なる者有り、又た云ふ、「画師尽くは殺すを休めよ、夢弼人を図より要めん」と。転た魔道に入る。又た胡虚白の「緑珠を詠ず」に云ふ、「枉し

く費す明珠三百斛、荊釵那ぞ及ばんや梁鴻に嫁するに」と。郎瑛之れを称す。皆「痴人の前（或はなことを言つてはならない、妄信されては困る）にて夢を説くを得ず」と云ふ所のものなり。永叔の「耳目の及ぶ所尚ほ此くの如し、万里安んぞ能く夷狄を制せん」というが若きは、所謂詩論にして、亦た自づから腐に近し）。

王漁洋は終生高啓を明代第一の詩人と見做していた（「明詩人多早慧而年不得四十者、如高季迪……数公、卓爾不可及矣」、『分甘餘話』卷三）。ところが、そんな高啓でも、「明妃曲」は下劣詩魔の所業だと言う。恐らく、王漁洋からしてみれば、王昭君や緑珠を題材として作詩した場合、彼女たちの不幸や悲しみを曲げて詠じることは邪道な行為だと感じられたのかもしれない。

また、歐陽脩の詩を、所謂「詩論」と述べている。この「詩論」とは、詩についての評論の意ではなく、杜甫の「詩史」というのと同様で、詩のなかにつづられた議論という意味であろう。この「詩論」を、漁洋は「近腐（くだらないもの）といつて差し支えないだろう」と言う。

王漁洋が否定的な意見を下した、田藝蘅の「竹枝詞」、高啓らの「明妃曲」（高啓「王明君」、『大全集』卷一。彭三吾「王嬙詩」、明・姚福『青溪暇筆』卷下）、歐陽脩の詩論、これらに共通するものは何だろうか。恐らく、それは無粋であるということだろう。漁洋は、『花草蒙拾』の第二条で見たような、韋莊らの詞句には、「『古蕃錦』と言えようか」、と高い評価を与えている。韋莊らの詞句は、

どれも字の選別や配列を配慮して、文字数以上の情報を、読者に与えるものだった。所謂、「味外之味」があるものだった。では、田藝蘅らの詩詞はどうだったろうか。

まず、欧陽脩の詩論だが、これも実は王昭君を詠じたものである（「再和明妃曲」、『文忠集』卷八。王安石の詩に和したもの）。全一八句の五言古詩であるが、王昭君を犠牲にして和平を結ぼうというのは漢王朝の失策だとした上で、急に「耳目所及云々」の七言句が差し挟まれる。恐らく、欧陽脩のこの句は、宋王朝と異民族国家との外交情勢について、述べられたものだろう。北宋王朝は、しばしば、西は西夏、北は契丹の遼朝の侵略に悩まされていた。結局、これらに貨幣を与えることを条件に仮初めの和平を得ていた。欧陽脩の詩はこのことを下地にし、王昭君を例に出すことで、弱腰外交に異論を唱えたものなのだろう。ところで、欧陽脩のこの抗戦を支持するような行為、詩という媒介を使って議論するのは如何なものだろうか。そもそも、心が動かされた際に生じる思いを詠じるのが詩であるのに、その詩を議論の道具として用いるのは、無粋以外の何物でもないだろう。議論をするなら、それに相応しい文体を用いてすべきなのだ。詩を読むほうも、この詩論を読んでも、共感するものもあるかもしれないが、きっと思うはずである。詩で語る事だろうか、と。

次いで、高啓らの「明妃曲」について考えてみたい。王昭君は、漢代、匈奴との和平のために単于に嫁がされることとなった不運の女性である。漢の元帝は、匈奴に嫁がせ

る宮女を、画を見て選ぶことにした。王昭君は、自身の美貌を自負しており、画家に賄賂を贈らなかつた。そのため、醜く描かれてしまった。元帝は醜く描かれていた王昭君を単于に嫁がせることにした。実際に王昭君を呼んでくると、絶世の美女であり、元帝は惜しく思ったが、後の祭り。王昭君は匈奴に嫁いでいった。怒った元帝は、画家をはじめ、宮女たちを殺したという。高啓らの詩は、この故事を下地にしている。しかし、王昭君の悲哀を詠じるべきものはずが、かえって、彼女に不幸を招く一因となった画家の毛延寿を擁護するような詠いぶりをしている。しかも、この画家を擁護する言葉は、高啓・彭三吾共に王昭君に語らせた言葉なのである。王昭君の悲しみは無視されてしまったのだろうか。

また、胡奎の「詠緑珠」（「緑珠墜樓」、『斗南老人集』卷五）も見ておこう。緑珠は晋代の富豪石崇の家妓だった。中書令の孫秀が緑珠の美貌を耳にして、石崇に彼女を求めた。しかし、石崇はこれを断つた。そこで、孫秀は偽の罪状をでっちあげて、石崇を逮捕して殺そうとした。樓上で宴会を開いている最中だった石崇は緑珠に、「罪を得たのはおまえのせいだ」と述べた。すると、緑珠は、「あなたのために死ぬことにいたしましょう」と言つて、樓から身投げして死んでしまった。さて、胡奎のこの詩は、裕福な者に嫁ぐのは、貧乏な梁鴻に嫁ぐのには及ばない、つまり、石崇ではなく梁鴻のような者に嫁げば良かったらうに、と結果論のみを述べていて、王昭君を詠じた詩と同様、緑珠

自身の悲哀を考慮していない。

高啓らの詩は、王昭君や緑珠自身の心情を曲げて解釈したものであり、王道を好む王漁洋の眼には、「下劣詩魔」・「魔道」、つまり邪道と映ったかもしれない。もう一つ、高啓らの詩に共通するものがある。それは、奇抜な説を提出しているということである。奇抜な説は、嘘か真かは二の次で、とにかく人目を引く。中にはその新鮮さから、妄信する支持者も現れるはずだ。だからこそ、高啓は彭三吾という支持者を得たし、胡奎は郎瑛に称賛された。このことを、漁洋は、「痴人前不得説夢」と言っている。つまり、この場においては、漁洋は、高啓と胡奎を「説夢（やたらめったなことを言う）」者、彭三吾と郎瑛のような人々を「痴人（未熟者）」と見做しているのだ。

恐らく、「痴人云々」というのは、教育者、あるいは詩壇を担う者としての立場から発せられた言葉であるように思われる。ただ、王漁洋は発想の奇抜さを全く否定してはいたわけではないはずである。それは、漁洋の息子王柏巖が編纂した『韓白蘇陸四家詩選』の序（『蚕尾文集』巻一）に、「退之詩、可選者多、不可選者少、去其不可者甚難。樂天詩、可選者少、不可選者多、存其可者亦難（退之の詩、選ぶべき者多く、選ぶべからざる者少く、其の可ならざる者を去るも甚だ難し。樂天の詩、選ぶべき者少く、選ぶべからざる者多く、其の可なる者を存するも亦た難し）」とあることから窺えよう。韓愈は、「同時代の詩人たちに与えた影響として、その強烈な復古思想は当然考えられるが、

より直接的には彼がなした技法上の開拓があげうるであろう。彼は六朝以来の対偶方法を排し、マンネリ化した辞句の使用を拒否し、屈折に富む章法を採用した。『文を以つて詩と為す』と非難されるほどの、破壊的な試みを詩に施したのである」（吉川幸次郎・小川環樹編『唐詩選』、「解説」伊藤正文執筆、筑摩書房、一九七三）と、評されている。しかし、王漁洋は平易で読みやすさを追求した白樂天よりも、韓愈のほうが見るべきものが多いと言うのだ。また、白樂天の詩を選ぶべきでないと述べた理由も、漁洋の筆記から推測できる。『香祖筆記』巻一に、「元・白二集、瑕瑜錯陳、持択須慎。初学人尤不可觀之。白古詩、晚歲重複什而七八。絶句作眼前景、語却往往入妙（元・白二集、瑕瑜錯陳して、持択須らく慎むべし。初学の人尤も之れを觀るべからず。白の古詩、晚歲重複すること什に七八。絶句は眼前の景を作して、語却って往往妙に入る）」とあり、白樂天の詩は玉石混交なので、初心者学習には向かないという。これは、白樂天が平易な詩を追求した故に、詩句の選択がマンネリ化したため、白居易と同様の弊害が起きないよう、学習者には向かないと述べていたのだろう。平易な言葉が並ぶ古詩に反して、眼前の景色を詠じた絶句は称賛されている。これは、景物に触れて出る真心からの言葉でつづられたものであり、絶句という短い詩型だからこそ、語句を練って、最小限の言葉で、当時の感情を最大限的確に伝わるよう工夫していたからではないだろうか。

王漁洋は、このように、作詩初心者が陥りやすい、とか

く奇をてらったような表現や、簡易さを追求して変化に乏しい詩を、教育者・詩壇の指導者として避ける傾向があった。だからこそ、王漁洋は、基礎や王道をなるべく大事にするようにしていた。

では、田藝蘅の「竹枝詞」は、どうだろうか。

注(2)の『香祖筆記』に紹介された楊維禎の「西湖竹枝歌九首」(『鉄厓古楽府注』巻一〇)は、一首もたけのこや竹を詠じた詩はない。また、後半に引用された、汪琬の「橘枝詞」(「洞庭橘枝詞二首」其二、『堯峰文鈔』巻八)は、詩中に橘を詠じているが、王漁洋はこれを特に否定していない。汪琬のこの詩は、江蘇省の洞庭(太湖)の風土を詠じたもので、橘柚は、この地方の特産品であり、ここで、橘を詠じるのは、洞庭の風土を伝える上で有効なのである。汪琬の例を見る限り、王漁洋は本意を詠じることを否定していたわけではないだろう。『香祖筆記』で、「前人亦有一二專詠竹者、殊無意致」と言うように、ただ竹ばかり、または橘ばかりを詠じることを無粋としているのだ。つまり、汪琬の「橘枝詞」のように、風土と本意をうまく組み合わせるのには構わないのである。

田藝蘅の「竹枝詞」を見てみると、たけのこや竹を詠じるばかりで、肝心の風土が描写されていない。また、四首全てが竹を詠じたものであり、変化に乏しく無粋と感じるのは仕方ないことだと言える。ただ、田藝蘅の詠じた竹は、それこそ竹のように節の堅い女性を喩えたもので、趣向だけなら面白いものと言えるだろう。しかし、漁洋にとって

は、卓人月がこの「竹枝詞」を正統と見做してしまっていたことが問題なのだ。

卓人月は、徐士俊と共に古今の詞論と詞を集めた『古今詞統』という書物を編纂しており、漁洋と鄒祗謨が共編した『倚声初集』も、この『詞統』を意識したものだった。恐らく、自身も本を編纂する際に意識した卓人月の発言が、詩詞を学ぶ人々にとって、ある程度の影響力をもつと、王漁洋は考えたのではないだろうか。卓人月が、田藝蘅の「竹枝詞」を一つの形、あるいは無粋な形として紹介していたなら、漁洋はわざわざ田藝蘅の「竹枝詞」を例に挙げることもなかっただろう。しかし、教育者としての立場から、先ず基礎や王道を学ぶことを重んじていた漁洋は、「痴人説夢(未熟な人がやたらなことを吹聴すること)」を防ぐために、この短い文章を設けたのではなからうか。

【5】

顧太尉⁽¹⁾「換我心、為你心、始知相憶深⁽²⁾」、自是透骨情語⁽³⁾。徐山民⁽⁴⁾「妾心移得在君心、方知人恨深⁽⁵⁾」、全襲此。然已為柳七⁽⁶⁾一派濫觴⁽⁷⁾。

【書き下し文】

顧太尉の「我が心を換へ、你ちが心と為さば、始めて相憶ふこと深きを知らん」というのは、自づから是れ透骨の情語なり。徐山民の「妾が心もて君が心に移し得なば、方め

て人が恨みの深きを知らん」というは、全て此れを襲はん。然れば已に柳七一派の濫觴と為せり。

【注釈】

(1) 顧太尉 五代後蜀の顧玠のこと。字・出身地・生没年不詳。前蜀の時、茂州刺史となり、後蜀の時、太尉となった。

(2) 換我心以下の句 『花間集』卷七所収、顧玠「訴衷情」詞中の句。「香滅簾垂春漏永、整鴛衾。羅帶重、双鳳縷黃金。窓外月光臨、沈沈。斷腸無處尋、負春心。○永夜拋人何處去、絕來音。香閣掩、眉斂月將沈。爭忍不相尋、怨孤衾。換我心、為你心、始知相憶深（香滅し簾垂れ春漏永くして、鴛衾を整ふ。羅帶重く、双鳳の縷は黃金なり。窓外月光臨めば、沈沈たり。腸を断ちて処として尋ぬる無く、春心に負かる。○永夜人を抛ちて何処にか去る、来音絶ゆ。香閣掩され、眉斂まりて月將に沈まんとす。争か相尋ねざるに忍びんや、孤衾を怨む。我が心を換へ、あなたが心と為さば、始めて相憶ふこと深きを知らん」。

(3) 自是 「本是」と同義。もともと・当然・言うまでもなく。江戸・釈大典『文語解』に、「自（みづから・おのづから・もと）、已也、躬・親也、独也と注す。……又、自由也。所從來（從來する所）（従つて来たる所）也の訓あり。從來 如是にして、今更せし

むるに及ばぬの義なり。『弟今議自赦（弟今議せられて自づから赦さる）』（越王（世）家）、『陳雖属楚、於天文自若其故（陳楚に属すと雖も、天文に於いて自づから其の故の若し）』（『漢書』地理志）。おのづからと訳して明なり」とある。また、王鏐『詩詞曲語辭例釈（第二次増訂本）』四一二頁に、「『自』又經常与『是』連用而構成一熟語、等于說『本是』とあり、いくつかの例文を挙げてゐる。いま、その中から、中唐・王建の「宮詞一百首」其九〇（『王司馬集』卷八）を挙げる。「樹頭樹底覓殘紅、一片西飛一片東。自是桃花貪結子、錯教人恨五更風（樹頭樹底殘紅を覓むるも、一片西に飛び一片東す。自づからはれ桃花貪つて子を結びしに、錯つて人をして五更の風を恨ましむ）」。

(4) 透骨情語 骨身に染み入る情愛を述べたことば。「透骨」は、骨に染み入る、つまり、程度の甚だ深いたとえ。宋・朱熹「奉酬圭父末利之作」詩（『晦庵集』卷六）に、「露寒清透骨、風定遠含芬（露寒くして清骨に透り、風定まりて遠く芬を含む）」とあり、明・凌濛初『二刻拍案驚奇』卷二九「贈芝蕨識破仮形、擲草菓巧諧真偶」に、「湯到之处、疼的不疼、癢的不癢、透骨清涼、不可名状（湯の到るの処、疼く疼かず、癢き癢からず、透骨の清涼、名状すべからず）」とある。

(5) 徐山民 南宋・徐照のこと。字は道輝、また、字は靈暉、号は山民、永嘉（浙江省温州市）の人。同じ

く永嘉出身の趙師秀（字は靈秀）・翁卷（字は靈舒）・徐璣（字は靈淵）と併せて「永嘉の四靈」と呼ばれた。みな、晩唐詩の風格があつた。著に、『芳蘭軒集』・『山民集』がある。伝は、『宋史翼』卷二八などに見える。

（6）妾心移得以下の句 宋・周密編『絶妙好詞選』卷

一所収、徐照「阮郎帰」詞中の句。「緑楊庭戸静沈沈、楊花吹滿襟。晚來間向水辺尋、驚飛双谷禽。○分別後、重登臨、暮寒天氣陰。妾心移得在君心、方知人恨深（緑楊の庭戸静沈沈、楊花吹かれて襟に満たんとす。晚來の間水辺に向かつて尋ねれば、驚き飛ぶ双谷禽。○分別せし後、重ねて登臨すれば、暮寒天氣陰れり。妾が心もて君が心に移し得なば、方めて人が恨みの深きことを知らん）。「移得在」の「在」字は、「於」字と同義であり、實際は置き字として読まない方がよい。※「谷禽」は谷川に集まる水鳥の意。『太平広記』卷九引『旌異記』に、「唯巖谷禽鳥、翔集喧乱（唯だ巖谷の禽鳥の、翔集して喧乱するのみ）」とある。

（7）柳七 北宋・柳永（九八七？～一〇五三？）のこ

と。初名は三變、字は耆卿、崇安（福建省崇安県）の人。景祐元年（一〇三四）の進士。屯田員外郎となつた。そのため、柳屯田と呼ばれる。柳七の「七」は排行。彼が柳七と呼ばれたこと、死後、妓女によって葬られたことが、馮夢龍『喻世明言』卷一二「衆名姫春風弔柳七」に見える。小説だが、実際に柳永は妓女たちが金を出し合つて葬られ、墓に詣でることを「弔柳

七」と言つたらしい。著に『樂章集』がある。伝は、『四庫全書総目提要』に詳しい。また、現代の唐圭璋に、「柳永事跡新証」（『文学研究』第三期、一九五七）などがある。

【訳文】

顧夙の「わたしの気持ち、あなたの胸に移し替えたなら、そのときやつと、わたしがどれだけ深くあなたを思っているかを、知ることになるでしょう」というのが、骨身に染み入るほど愛情深い言葉であることは、もはや説明を要すまい。徐照の「わたくしの心をあなたの胸に移したならば、そのときはじめて、あたしの気持ちの深さを知りましょう」というのは、全面的に顧夙の詞を踏襲したものであろう。そういうことであれば、柳永が好んで詠じた情愛を全面的に押し出したような詞の萌芽を、五代の顧夙の詞にすでに求めることができるわけだ。

【六】

牛給事⁽¹⁾「須作一生拚、尽君今日飲⁽²⁾」、狎昵⁽³⁾已極⁽⁴⁾。『南唐』⁽⁵⁾「奴為出来難、教君恣意憐⁽⁶⁾」、本此。至「檀口微微⁽⁷⁾」、「靠人緊把腰兒貼⁽⁸⁾」、風斯下矣。

【書き下し文】

牛給事の「須らく一生をして拚て、君が今日の飲を尽く

さしむべし」というのは、狎昵はなは已だ極まれり。『南唐』に「奴は出で来たること難きが為に、君をして意をはし恣まにして憐れましめん」というのは、此れに本づく。「檀口微微」、「人に靠ること緊にして腰兒を把つて貼かしむ」というに至つては、風斯に下れり。

【注釈】

(1) 牛給事 前蜀の牛嶠のこと。字は松卿、また、延峰、隴西(甘肅省)の人。唐の僖宗の乾符五年(八七八)の進士。唐に仕えていた時に拾遺となり、前蜀に仕えた時に給事中となった。伝は、『唐詩紀事』巻七一などに見える。

(2) 須作一生拚以下の句 『花間集』巻四所収、牛嶠「菩薩蠻」詞中の句。「玉楼氷簾鴛鴦錦、粉融香汗流山枕。簾外轆轤聲、斂眉含笑驚。○柳陰煙漠漠、低鬟蟬釵落。須作一生拚、尽君今日歡(玉楼氷簾鴛鴦の錦、粉は融けて香汗山枕に流る。簾外轆轤の聲、眉を斂め笑ひを含んで驚く。○柳陰煙漠漠、低鬟蟬釵落つ。須らく一生をして拚て、君が今日の歡を尽くさしむべし)。「作」は使役動詞。古くは『周礼』などにも見え、唐・五代においては、杜甫の詩によく見える(王鏊『詩詞曲語辭例釈』四一九頁)。

(3) 狎昵 人となれ合い親しむこと。ここでは、特に男女間の淫靡な付き合いを指して言ったものかもしれ

ない。清・蒲松齡『聊齋志異』巻二「胡四姐」に、「生就視、容華若仙、驚喜擁入、窮極狎昵(生就ち視れば、容華は仙の若し、驚喜して擁し入れ、狎昵を窮極す)」とある。

(4) 已極 極まりつくしている。「已」は、甚だしい。

『左伝』宣公一一年に、「抑人亦有言曰、『牽牛以蹊人之田、而奪之牛』。牽牛以蹊者、信有罪矣。而奪之牛、罰已重矣(抑そも人亦た言有りて曰く、『牛を牽きて以て人の田を蹊れば、而ち之れが牛を奪ふ』と。牛を牽きて以て蹊るは、信に罪有り。而れども之れが牛を奪ふは、罰已だ重し)」とあり、また、『孟子』離婁篇下に、「孟子曰、『仲尼不為已甚者』(孟子曰、『仲尼は已甚しきを為さざる者なり』)」とある。概ね、形容詞の前に「已」字が付く場合、「甚」と同義と見てもよさそうである。

(5) 南唐 宋・馬令の『南唐書』のこと。唐王朝の後に興った十国の中の一つ南唐の歴史を綴った歴史書。南唐は、呉の禪定を受けて建国された。九三七〜九五まで存在した。建国者は李昇。二代目の中主李璟と三代目の後主李煜は、詞の作者としても有名。なお、『南唐書』は南宋の陸游が著したものもある。昭代叢書本では、「鍾隱」となっている。「鍾隱」は、李煜のこと。「鍾山隱者」の略で、李煜が画を描いた際の落款に用いられた。

(6) 奴為出来難以下の句 馬令の『南唐書』巻六、ま

た、宋人編纂『尊前集』卷下所収、李煜の「菩薩蠻」詞中の句。「花明月暗飛輕霧、今宵好向郎辺去。剗襪步香階、手提金縷鞋。○画堂南畔見、一向偎人顫。奴為出来難、教君恣意憐（花明かに月暗くして輕霧飛ぶ、今宵好く郎が辺に向かつて去るべし。剗だ襪のみにして香階を歩き、手は金縷の鞋を提ぐ。○画堂南畔に見ゆれば、一向に人に偎りて顫へり。奴は出で来たること難きが為に、君をして意を恣にして憐れましめん）。この詞は、李煜の後室周后が、まだ后となる前、李煜と密会していた時に、李煜が周后に贈った詞とされる。※「好向云々」の「好」字は、「宜」と同義で、くするのにちようどよい、という意味。「剗襪」は、靴下だけ、という意味。「一向」は、一途に・夢中で。「顫」は、身悶える、または、頭をすりつける動作か。（7）檀口・靠人の句 作者不明。出典も未詳。ただ、清・褚人穫『堅瓠八集』卷一に、『支頤集』有『幽飲詞』、調寄『点絳唇』云、『殢雨尤雲、靠人緊把腰兒貼。顫声不徹、肯放郎教歌。檀口微微、笑吐丁香舌。噴龍麝、被郎輕齒、却更喚郎劣』（『支頤集』に『幽飲詞』有り、調『点絳唇』に寄せて云ふ、『殢雨尤雲、人に靠ること緊にして腰兒を把つて貼かしむ。顫声徹せず、肯へて郎が歌はしむるに放す。檀口微微、笑ひて吐く丁香の舌。龍麝を噴きて、郎が輕齒を被ひ、却つて更ち郎の劣るに喚る』）とあり、漁洋が引用したのは、恐らく、この「点絳唇」だろう。「檀口」は、紅い唇

のこと。「靠人」は、人にもたれかかること。「把A B」は、AにBさせる、という口語的な言い回しで、ここでは、腰をぴたりくつかせるという意味。※「殢雨尤雲」は、男女が愛し合うさま。「不徹」は、止まない・終わらない、という意味。「丁香舌」は、丁香（香木）のように芳しい舌。「龍麝」は、龍涎香と麝香の並称で、ここでは、単に芳しい香を言う。「却更」は、同義複合語で、反対に、思っていたのとは違い、という意味。

【訳文】

牛嶠の「今宵は、わが一生を擲つて、精一杯、あなたを悦ばせましょう」という詞は、男女のなれ合いの描写が極限にまで達していてひどいほどだ。そして、馬令の『南唐書』に引かれる李煜の、「わたしはなかなか表に出てくれません、ですから、あなたには思う存分わたしをめちゃくちゃにさせてあげますわ」という詞は、牛嶠の詞を下地としている。「ものもいろのくちびる淡く紅さし」、「あの人にぴたりと腰をよりそわせ」というのに至っては、下品もここに極まれりというものである。

【七】

絶調不可強擬。近張杞有『和花間詞』一卷。雖不無可採、要加妄男子遍擬「十九首」与「郊祀」・「饒歌」

耳。

【書き下し文】

絶調は強ひて擬ふべからず。近ごろ張杞ちやうきに『和花間詞』一卷有り。採るべき無くんばあらずと雖も、要は妄男子の遍く「十九首」と「郊祀」・「饒歌」に擬ふるに加はるのみ。

【注釈】

(1) 絶調 絶妙な曲調。転じて、絶妙な詩文。梁・無名氏「七召」(『文苑栄華』卷三五二、『全梁文』卷六九)に、「至廼鄭衛繁声、抑揚絶調、足使風雲變動、性靈感召(廼ち鄭衛繁声、抑揚絶調なるに至つては、風雲をして變動し、性靈をして感召せしむるに足る)」とある。また、清・陳廷焯『白雨齋詞話』卷六に、「語不必深、而情到至処、亦絶調也(語必ずしも深からざるも、而れども情至処に到れば、亦た絶調なり)」とある。『白雨齋詞話』の用例を見るに、音声のほかに、人を感動させるような情感こもった作品を言うらしい。

(2) 張杞 明・張杞、字は迂公、黄陂(湖北省)の人。著に『和花間詞』がある。明・卓人月等編『古今詞統』に「和花間詞」が六首、清・朱彝尊等編『明詞綜』卷八に小伝、並びに「浣溪紗」一首が収められている。

(3) 『和花間詞』 張杞が『花間集』所収の詞四九六首の中、四八七首に和したもの。『和花間詞』について、漁洋以外の評論を挙げておく。

沈天羽曰、張迂公擬『花間集』四百八十七首、発妙逞妍。近日一詞手、但篇篇和韻、未免拘牽、字字求新、未免艱鑿耳。(『古今詞統』卷一〇、張杞「甘州遍・和毛文錫韻」注)

(沈天羽曰く、張迂公『花間集』に擬ふこと四百八十七首、妙を發し妍を逞しくす。近日の一詞手、但だ篇篇韻に和して、未だ拘牽きうけんを免かれず、字字新を求めて、未だ艱鑿けんさくを免かれざるのみ)。

『詞統』、西蜀・南唐而下、独開北宋之壘、又転為南宋之派、『花間』致語、幾于尽矣。黄陂張迂公、起而全和之、使人不流于庸濫之句、謂、「非其大力与」。(『明詞綜』卷八、張杞注)

(『詞統』にいう、西蜀・南唐而下、独り北宋の壘を開き、又た転じて南宋の派と為り、『花間』の致語、尽くるに幾し。黄陂の張迂公、起ちて全て之れに和し、人をして庸濫の句に流れざらしむるは、謂へらく、「其の大力に非ざらんか」と)。

右の評論を見ると、漁洋の評と反して、『和花間詞』の評価は高かったらしい。しかし、『古今詞統』に六首(卷三・四・五・六・八・一〇)、『明詞綜』に一首

(巻八)しか採録されていないことから、高評価を下している者のほうが少数派だったかもしれない。

(4) 要 所詮は・とどのつまりは・結局。

(5) 妄男子 考えなし。事情に通じていない者。南宋・陸游「跋傅正議至樂庵記」に、「妄男子往往起閭巷、取美官(妄男子往往にして閭巷に起こり、美官を取る)」とある。なお、「狂妄男子」という言葉は、唐代すでに用いられていた(盛唐・元結「与李相公書」、「又令将命、「謀人・軍者、誰曰易乎」。相公見某。但礼文揖之外、無所問焉、忽然狂妄男子(又た令ありて命を將ふ、「謀人・軍者、誰れか易しと曰はんか」と。相公某を見る。但だ礼文揖揖の外、問ふ所無くして、忽然として狂妄男子のごとし)」。)

(6) 遍 あまねく・すべてとおして。

(7) 「十九首」・「郊祀」・「饒歌」 すべて漢代の詩歌。「十九首」は、後漢ごろの作とされる「古詩十九首」。

「郊祀」と「饒歌」は、『樂府詩集』において、「郊廟歌辞」・「鼓吹曲辞」に組み込まれている。共に漢代から歌われていた。これら漢代の樂府は、明代の古文辞派が好んで擬作したものであり、第七条での漁洋の論は、むやみやたらに古の作品を真似てばかりいる人へ警鐘を鳴らしたものだろう。

【訳文】

すばらしい詞というのは、やたらと模倣すれば良いというものではない。近年、張杞という者が『和花間詞』一卷をものした。とりあげて見るべきものがないではないが、所詮は、道理のよく分かっている者が、始めから終わりまで、それこそ考えなしに「古詩十九首」や、「郊祀歌」・「饒歌」といった漢代の樂府を真似ているのと、なんら変わらないのだ。

【餘説】

第七条を見ると、王漁洋は和詞を否定しているように思える。ただ、これは、「強ひて擬ふべからず」と言うように、やたらに、それこそ「妄男子」のように、考えなしに「絶調」というような作品を模倣することに反対しているに過ぎない。

王漁洋は、詩に関して言えば、『香祖筆記』巻八に、「予平生為詩、不喜次韻、不喜集句、不喜數疊前韻(予平生詩を為るに、次韻を喜ばず、集句を喜ばず、數しば前韻に疊ぬるを喜ばず)」とあるように、和詩制作に否定的な態度を見せている。しかし、和詞制作については別の考えを持っているようだ。

王漁洋の『池北偶談』巻一一「和韻詞」に、

先吏部兄作長調、往往好仄陰韻、一調疊韻、有至十餘闕者。在杭州、与宋荔裳・曹顧菴倡和「滿江紅」詞、同用「上」・「杖」・「狀」等字。兄句云、「雨滲一犁田

憤喜、波添三尺河魚上」。用『史記』「河魚大上」語也。又、「自課織簾還 hands、便從荷篠非無杖」。又、「易得濁醪謀若下、難逢春水如天上」。又、「司馬高才元和腐、彦淵博學真須杖。怪吾徒、底事昵虫魚、臣無狀」。又、「堤柳已隨坡老没、竹枝誰駕廉夫上」。又、「漆後斷紋仍可鼓、削餘方竹還堪杖」。又、「顧我已甘居廡下、如公才合居樓上」。疊出不窮、皆奇句也。

後在揚州、与陳其年輩倡和「念奴嬌」詞、同用「屋」字、亦至十餘往復。如、「還似離騷屈子、句裏龍堂鱗屋。削迹艱虞、擅場風雅、未遣中書禿」。又、「十載名場相犄角、戎子支駒逐鹿」。又、「我似小乘初禪、愧他杯渡、肆噉人間肉。羨汝機鋒殊自有、已似南能稻熟」。又、「更貪清曉晶簾、臥看膏沐」。此類甚多。

兄常自跋云、「右小詞諸闕、皆雜次諸公韻。諸公率謬許其押韻之工、僕則自謂、『此實欲省思力。如昔人云、勿勿不暇草書耳』」。嘗謂、「詩不宜次韻、次韻則慮傷逸氣。詞不妨次韻、次韻或逼出妙思」。其持論如此。

(先吏部兄長調を作るに、往往にして陰韻を庄するを好み、一調にして韻を疊ねて、十餘闕に至ること有り。杭州に在りしとき、宋荔裳・曹顧菴と「滿江紅」詞を倡和し、同じく「上」・「杖」・「狀」等の字を用ふ。兄の句に云ふ、「雨滲すこと一犁にして田憤喜び、波添ふこと三尺にして河魚上らん」と。『史記』の「河魚大いに上る」の語を用ふるなり。又たいう、「自ら織簾を課するに還た手有らんや、便ち荷篠に従ふに杖無

くんば非ず」と。又たいう、「濁醪を得ること易くして若く下を謀り、春水に逢ひ難きこと天上の如し」。又、「司馬の高才元和の腐、彦淵の博學真に須らく杖せらるべし。怪しむ吾が徒、底事ぞ虫魚に昵づきて、臣に狀無き」と。又たいう、「堤柳已に坡老に随つて没す、竹枝誰れか廉夫を駕して上らしめん」と。又たいう、「漆後の斷紋仍ほ鼓すべく、削餘の方竹還た杖づくに堪ふ」と。又たいう、「顧ふに我れ已に甘んじて廡下に居ること、公の才かに合に樓上に居るべきが如し」と。疊出して窮まらず、皆奇句なり。

後揚州に在りしとき、陳其年の輩と「念奴嬌」詞を倡和し、同じく「屋」字を用ひて、亦た十餘往復に至る。「還た離騷の屈子を伝ふるに似たり、句裏の龍堂と鱗屋と。削迹の艱虞、擅場の風雅、未だ中書をして禿げしめず」というが如し。又たいう、「十載名場相犄角し、戎子駒を支え鹿を逐ふ」と。又たいう、「我れ小乗の初禪に似たり、他の杯渡に愧じて、肆に人間の肉を噉ふ。羨む汝が機鋒殊に自づから有つて、已に南能の稻熟するに似たるを」と。又たいう、「更に清曉晶簾を貪り、臥して膏沐を見る」と。此の類甚だ多し。兄常て自ら跋して云ふ、「右の小詞諸闕、皆諸公の韻に雜次す。諸公率ね謬りて其の押韻の工なるを許すも、僕は則ち自ら謂へらく、『此れ実は思力を省かんと欲す。昔人の、勿勿と暇あらずして草書するのみ、と云ふが如し』」。嘗て謂ふ、「詩は宜しく次韻すべから

ず、次韻すれば則ち逸氣を傷^{そこな}はんことを慮る。詞は次韻するを妨げず、次韻すれば或いは逼つて妙思を出ださしめん」と。其の論を持すること此くの如し。

右に挙げたのは、王漁洋の兄王士禛の和韻詞への態度だが、漁洋もその影響を受けていたことは、漁洋自身が、「不孝士禛与先生為兄弟四十年矣、撫我則兄、誨我則師、真有如子由所云云者（不孝士禛先生と兄弟たること四十年、我れを撫すれば則ち兄、我れを誨ふれば則ち師、真に子由（蘇轍）の云云する所の如き者有り）」（王漁洋『王考功年譜』）と述べ、さらには、漁洋に一七首の「和韻李清照詞」があることから窺える。

和韻には三つの型がある。一、原作と同じ韻目を使用するだけの「依韻」。二、原作と同じ韻目、同じ韻字を用いるが、韻字を置く場所は自由な「用韻」。三、原作と同じ韻目、同じ韻字を用い、なおかつ、原作と同じ箇所を押韻する「次韻」。

右に挙げた王士禛の「滿江紅」詞はいずれも次韻の詞である。陳維崧と倡和した「念奴嬌」詞については、現存の王士禛、及び陳維崧の詞集には見えないので分らないが、恐らくは次韻の詞であつたと思われる。

注目したいのは、「勿勿不暇草書」、及び「詞不妨次韻、次韻或逼出妙思」という王士禛の言葉である。後者の「詞不妨次韻、次韻或逼出妙思」は、そのまま翻訳すれば、「詞は次韻しても差支えない。次韻すれば、追い込まれた状況から良い発想が浮かぶかもしれない」というようなことに

なろう。では、前者の「勿勿不暇草書」とはどういうことなのか。この言葉は、晋・衛恒の「四体書勢」に見える（『晋書』卷三六、衛恒伝）。該当箇所を挙げてみよう。

弘農張伯英者、因而轉精甚巧。凡家之衣帛、必書而後練之。臨池學書、池水盡黑。下筆必為楷則、号「忽忽不暇草書」。

（弘農張伯英なる者、因つて轉た精にして甚だ巧みなり。凡そ家の衣帛、必ず書して後に之れを練る。池に臨みて書を学べば、池水尽く黒し。筆を下せば必ず楷則と為るも、「忽忽と暇あらずして草書するのみ」と号す）。

張伯英は、後漢の張芝。張奐の子。弟子の韋仲將に「草聖」と称され、弟の張昶も草書に巧みだった（『後漢書』卷六五・張奐伝）。「四体書勢」の記述に拠ると、草書は漢に興つたとされ、杜度が草書（ここで言う草書は、隸書の速書きである章草のこと）に巧みだったというが、收筆は安定していたけれども、書の勢いは微弱だった。杜度に次いで、崔瑗・崔寔が出て、書の勢いは増したが、今度は收筆がやや雑になつてしまった。そこで、張伯英が出て、草書の完成度を高めたとされる。なお、『後漢書』張奐伝注に引かれる王愔の『文字志』には、張伯英が杜度と崔氏の書法を学んだことが記されている。

右に挙げた文を見ると、張伯英は筆を振るえば、書の手本となるような出来栄えだったけれども、自分では、「休む暇もないほど忙しくて、（隸書体で文字を書くことがで

きずに「草書体で書いてただけだ」と述べていたことになる。これは、張伯英の謙遜の言葉であるが、彼が後に「草聖」と称されるほどの草書の達人になったという結果から鑑みれば、草書を書く必要に迫られたからこそ草書の腕が上達した、少なくとも、周りの人々からはそう見られていたと考えても差支えないだろう。

王士禄が、「此実欲省思力（此れ実は思力を省かんと欲す）」と言ったのは、「和韻したのは、実は（詞を作る際に、詞牌や韻目・韻字などを）あれこれ考える手間を省こうとした」という謙遜も込められているだろう。すなわち、「勿勿不暇草書（必要に迫られてものした）」ということである。ただ、「勿勿不暇草書」という言葉の裏には、必要に迫られたからこそ、草書が上達したという含みがあった。つまり、王士禄自身も、自らを逼迫した状況に追い込んで作詞の上達を図ったという含意を持たせて、この語を用いたのだろう。

以上のことから、「勿勿不暇草書」も、「詞不妨次韻、次韻或逼出妙思」も同様のことを言っていることになるが、同じ主張を繰り返していることから、王士禄の和韻詞制作態度、並びに制作意図というものが明確になった。

実際に、王士禄の詞集『炊聞詞』（清・孫默『十五家詞』所収）を見ると、和韻詞が多く見られる。試みに、王士禄・王漁洋・宋琬・曹爾堪らの詞集が収録された、『十五家詞』中に見える各人の詞集の和韻詞の数を比べてみることにした。和韻詞は主に、「和○○韻」・「用○○韻」・「次○

○韻」・「同○○」・「疊用前韻（この題では、自身の詞に次韻したものが多く）」と題されたものを数えた。なお、題が「同○○賦」・「同○○作」となっているものは、恐らく倡和の作と思しいが、単に同じ場所で作ったことを言っているだけかもしれないので、ここでは除外した。「分得○字」・「限韻」となっているものも数えていない。『十五家詞』収録順に列挙する。

- ① 吳偉業『梅邑詞』二卷、全一〇一首中、和韻詞 一首。
 - ② 梁清標『棠村詞』三卷、全一五七首中、和韻詞 八首。
 - ③ 宋琬『二郷亭詞』二卷、全一六〇首中、和韻詞 八首。
 - ④ 曹爾堪『南溪詞』二卷、全二三〇首中、和韻詞 四一首。
 - ⑤ 王士禄『炊聞詞』二卷、全一七五首中、和韻詞 六五首。
 - ⑥ 尤侗『百末詞』二卷、全一四三首中、和韻詞 二四首。
 - ⑦ 陳世祥『合影詞』二卷、全一六二首中、和韻詞 一六首。
 - ⑧ 黃永『溪南詞』二卷、全一二九首中、和韻詞 一三首。
 - ⑨ 陸求可『月湄詞』四卷、全三七〇首中、和韻詞 一首。
 - ⑩ 鄒祗謨『麗農詞』二卷、全一四九首中、和韻詞 四二首。
 - ⑪ 彭孫通『延露詞』三卷、全一二五首中、和韻詞 四〇首。
 - ⑫ 王士禎『衍波詞』二卷、全一二二首中、和韻詞 四九首。
 - ⑬ 董以寧『蓉波詞』三卷、全二〇一首中、和韻詞 一二首。
 - ⑭ 陳維崧『烏糸詞』四卷、全二六四首中、和韻詞 五一首。
 - ⑮ 董俞『玉鳧詞』二卷、全一三七首中、和韻詞 一三首。
- 十五人の詞人の和韻詞の数を見てみると、王士禄が六一首と最も多く、次いで多いのが陳維崧の五一首、そして、王漁洋の四九首と続くが、収録される全詞数との割合から

見ると、王士祿と王漁洋の和韻詞は詞集の三分の一以上を占めており、先の『池北偶談』の記述と併せ考えると、漁洋兄弟が意識的に和韻詞制作を行っていただろうことが窺える。

王士祿と王漁洋が和韻詞を意識的に制作していたことが分かったうえで、彼らの和韻詞がどういったものなのか、漁洋が否定的な批評を下した張杞の和韻詞とはどう違うのか、実際に作品を列挙して、その違いをなるべく具体的に探ってみたい。

まずは、張杞の『和花間詞』とその原詞を見比べてみよう。列挙する順番は、原詞・和韻詞とする。以下同じ。

韋莊「浣溪紗」(『花間集』卷二)

惆悵夢餘山月斜、孤灯照壁背紅紗。小樓高閣謝娘家。

○暗想玉容何所似、一枝春雪凍梅花。滿身香霧簇朝霞
(惆悵せん夢の餘山月斜めに、孤灯壁を照らして紅紗に背るを。小樓高閣謝娘の家。○暗に想ふ玉容何の似る所ぞ、一枝の春雪梅花凍ゆ。満身の香霧朝霞簇る)。

※「背紅紗」は、(物の)かげになる、ということ。

ここでは、灯が紅い薄絹の覆いのようなものを被されて、光が軽減すること。村上哲見氏に論考がある(『燭背・灯背ということ』『中国文学報』第一冊、また、岩波中国詩人選集『李煜』一一〇頁)。「謝娘家」は、妓楼を指していると解釈したい。なお、村上氏は、主題となる女性を指すとし(『李煜』一二六頁)、特に妓女だと明言していないが、後関結句の「香ぐわしいも

やのヴェールにつつまれているかのようだったあの姿(今は面影を人知れず心に浮べるのみである)」という翻訳を見ると、前蜀の王衍に恋人を奪われたという故事を意識しているのかもしれない。

張杞「浣溪紗・步韋莊韻」(『古今詞統』卷四)

恨却東風吹柳斜、半穿簾幕半穿紗。夢魂驚散落誰家。

○繡帶綠嬌柔野草、香衫紅妬偏階花。幾聲春鳥入殘霞
(恨却す東風柳を吹きて斜めに、半ば簾幕を穿ち半ば紗を穿つを。夢魂驚き散じて誰が家にか落つる。○繡帶の緑は嬌にして野草よりも柔らかく、香衫の紅は妬くして階花に偏る。幾聲の春鳥殘霞に入る)。※「落誰家」は、いつたいどこに落ち着いたのか。つまり、目覚めたのは何処か、ということ。「偏階花」は、恐らく、庭先の花を脅かす、つまり、庭先の花よりも美しい、という意味だろう。

張杞が韋莊の詞を意識していることは、詞の構成から見て明らかである。語彙の面から言えば、「惆悵」(韋)と「恨却」(張)、「夢餘」(韋)と「夢魂」(張)が挙げられる。また、構成の面から言えば、前関は、独り寝の女性が恋人と一緒にいた甘い夢から目覚めて悲しむという設定、後関は、前関で語られた女性の容貌の描写、と言った点が類似している。若干の差異を挙げれば、韋莊の方は時間設定がまだ夜の明けきらぬ時間帯であるのに対し、張杞の方

はもう朝焼けが消えかかっている時間帯だということである。しかし、この差異が、韋莊と張杞の力量の差を明確に示してしまっていると言える。

「浣溪紗」のような小令（短い詞）は、後関の結句が重要だと言われる。村上哲見氏は、北宋・晏殊の「浣溪紗（一曲新詞）」の後関の「無可奈何花落去、似曾相識燕歸來（奈何ともすべき無し花の落り去くを、曾ての相識に似て燕歸り來たる）」という対句の妙を説いたうえで、

なおこれに続く結びの一句が、この対句の奏でる響きをいつそう深いものに行っていることも見逃せない。「小園香徑独徘徊」の「徘徊」は、あてもなくさまようであるとともに、とりとめもなく想念がひろがるの意でもあるであろう。この詞の場合、近体詩などとは違って単独の句で結ぶことが却って無限の餘韻を呼び起し、独特の効果をもたらしている（『宋詞研究―唐五代北宋篇』序説第二章「詩と詞」第三節「晏殊『浣溪紗』詞句の例」四二頁、創文社、一九七六）。

と述べている。また、夏承鸞氏も『唐宋詞欣賞』（浙江古籍出版社、二〇〇三。原著は百花文藝出版社より一九八〇に出版）に、「説小令的結句」の一節を設けて、

詞の小令は、短いので、その句はよく練られていなければならぬ。結句などはさらに言葉尽きても餘韻冷めやらぬといったものが要求される。小令の結句がすばらしければ、詞全体を引き立てて彩りを添えるはずだ。逆に、結句がまずければ、それまでの妙句も光彩

を失ってしまうだろう。そのため、結句は如何なる時も小令詞のカギを握る部分なのだ

（詞裡の小令、因為体制短小、造句特別要凝練。結句更要語意不尽。一首小令的結句好、会映帶全首有光采。結句不好、前文的好句也会為之減色。所以結句往往是關鍵所在）。

と述べ、先の晏殊の「浣溪紗（一曲新詞）」を挙げて、次のように述べる。

「花の落りゆく」のを人の去るのに擬えるのは、常套の修辭法である。「燕がかえり来る」ことによつて去りゆく人を引き立たせるのは、一步進んだ描寫法である。燕は二羽ならんで帰ってくるもので、これも、人が去った後の孤独感を十分に引き起こしている。さらに、この詞では、「去ったもの」を描くのが主張したいところであり、主役である。「やつて来るもの」を描くのは（主張を補う）余分な文であり、脇役である。

一般的に論文を書く際は、主張を述べた文章が、余分な文章よりも当然重きを置かれる。しかし、文学作品においては、時として余分な文章のほうが却って主張を述べた文章よりも出来栄えがよいことがあるのだ。

たとえば、柳永の「雨霖鈴（寒蟬凄切）」の「多情自古へ自り離別を傷む、更に那んぞ冷落清秋の節に堪へんや」という句は主張を述べた部分である。この句に次ぐ「今宵酒醒むるは何れの処ぞ、楊柳の岸曉風と残月

と」は、先の主張を引き立たせる余分な文である。しかし、この余分な文が主題を述べた部分よりも優れた名句なのである。一般的に、論文を書くとき、主張を述べたところは後ろにもつてきて、文章全体のまとめとすることで、その論文を際立たせる作用を起こさせる。しかし、文学作品においては、主張を助ける余分な文が、主張を述べたところよりも重要な地位を占める時があり、「(そうした余分な文は)主張が述べられた後に挿入されることが多い。晏殊のこの詞は「燕歸り來たる」の句を「花落り去く」の後に配置している。これは、まさしく柳永の「雨霖鈴」の作詞法と同じである。こうした配置が詞全体の歌声と情感をますます豊かにしているのだろう。

この長らく語られてきた「花落」「燕歸」という名対句の後に、読者はさらに色彩を放つ名句で、詞全体をまとめてくれることを要求するだろう。しかし、残念なことに、晏殊が描き出したのは「小園香徑独徘徊す」という七文字だった。先の「花落」「燕歸」という対句が強烈な句だったために、これと対比してしまうと、「小園香徑独徘徊す」という一句のやや軟弱なところが目立ってしまう。これは、一有名詞人の怠け筆(結句まで力を抜かずにいられなかったこと)であることは疑いない。

(以「花落」比人去、是尋常語。以「燕來」反襯人去、便是加倍写。燕子是双双回来的、也更足勾引起人去後

的孤零之感。還有、在這首詞裡、写「去」是本意、是主。写「來」是餘文、是賓。一般写論文、主意当然重于餘文。在文学作品裡、有時餘文却比主意写得出色。如柳永的「雨霖鈴」、「多情自古傷離別、更那堪冷落清秋節」這句是主意。接着「今宵酒醒何處、楊柳岸曉風殘月」、是点染主意的餘文。這餘文却是勝于主意的名句。一般写論文、主意写在後面、總結全文、起画竜点睛的作用。但是文学作品裡、餘文的地位有時重于主意、要放在主意之後。這首詞把「燕歸來」句安排在「花落去」之後、正如柳永「雨霖鈴」的作法相同。這樣安排会更增強全詞的唱嘆神情。

在這「花落」「燕歸」一聯伝誦名句之後、讀者要求有一更出色的好句、來結束全篇。可是很失望、晏殊只写出「小園香徑独徘徊」這樣的七箇字。前面「花落」「燕歸」一聯是強句、對比之下、「小園香徑独徘徊」一句顯得較弱。這無疑是這位名詞家的懈筆。

村上氏と夏氏の晏殊詞への評価の差異は、村上氏が少なくとも論文においては詞の派閥に自身の好みを差し挟まないのに反し、夏氏は辛棄疾のような豪放派を好む傾向が著書から見とれることに拠ると考えられる。晏殊詞の評価はどうであれ、両氏ともに小令の結句に詞全体の生死を左右するほどの独特の効果があとする主張は変わらない。

先の韋莊と張杞の力量の違いも結句にあると思われる。後闕の結句、韋莊は「滿身香霧簇朝霞」と、主題となる女性の容貌を描写して終わるのに対し、張杞は「幾声春鳥入

残叢」と状況描写に止まる。張杞の詞は、結句に状況描写をもつてくることで、詞中の状況が明確化している。しかし、後闕では、女性の容貌を描写していたのに、結句でだしぬけに状況説明の句が挿入されるのは、詞全体の構成から見ても不自然である。

韋莊の詞は、前闕ですでに「山月」「孤灯」「謝娘家」と状況説明がなされている。しかも、張杞のように、時間だけ述べたものではない。場所さえも特定しているのだ。そのうえ、前闕の結句に「斜」「照」「背」などといった動きを示す語のない、静的な句を差し挟むことによって、前闕に一種の余韻のようなものを持たせているし、この句があることで、前の二句が引き立っていると言える。また、前の二句との連結も自然である。前闕で状況設定を巧みに済ませることで、後闕では余計な句を挿入する必要がなくなる。韋莊の詞の場合、奇抜さはないが、後闕全体がよくまとまったものになっていて、張杞のような不自然さはない。ただ、句自体に奇抜さはないが、「浣溪沙」詞は、前後闕ともに、結句が単独の句であることを考えると、本来なら隔たりがある第二句と第三句を連結させたことに真新しさ、巧妙さがあるのかもしれない。

また、韋莊詞の最大の特徴として、詞中に自己の境遇を反映させたことが挙げられる。村上氏は温庭筠と韋莊の詞の差異を指摘して、

飛卿の詞の中には作者自身、飛卿自身が姿を現わすことはまずないといってよいが、端己の詞の中には、し

ばしば彼自身、少なくともその影像が登場する。すでに挙げた詞についても、「遊人」「洛陽才子」などの語は、端己自身を指すと考えるのが自然であるが、このような表現は、飛卿の詞の中には決して見出せないのである（『宋詞研究―唐五代北宋篇』上篇第三章「五代詞論」第一節「『花間集』と蜀の詞」一四四頁）。

と述べ、夏承燾氏にも「不同風格的温（庭筠）・韋（莊）詞」「論韋莊詞」（『唐宋词欣賞』所収）があり、韋莊詞は自己の境遇を詞に反映させているという点が強調されている。例として挙げた詞でも、韋莊は「暗想」という韋莊自身の影を窺わせる描写があるのに対し、張杞の方は閨怨詞として徹底している。

以上のことから、張杞は詞の構成や語彙は擬えることはできているが、詞全体の構合力、張杞自身の個性といったものが欠けていることが分かる。もとより模倣を目的とした詞なのだから、個性云々は切り捨てるべきかもしれない。しかし、書道の臨書が書法上達を目的としたように、模倣詞も最終的な目的は自身の詞作の上達にあるはずである。ところが、模倣に専念するあまり、意識的にか無意識にかはともかく、個性が押し殺されることとなり、ただの模倣に止まるどころか、自身の上達もなく、粗悪な模倣品にまで落ち込む例が、漁洋の時代には、恐らくあったのだ。だからこそ、王漁洋は『花草蒙拾』で張杞の詞を「雖不無可採（選集に採択してもまあよいが）」と述べつつも、「妄男子」云々と少し酷な評価を下したのではないか。

次いで、王士祿ら三人の和韻詞を見てみよう。

曹爾堪「滿江紅・江村」（『十五家詞』卷九所收『南溪詞』卷下）

柳浪方高、桃花雨、一村都漲。応自慰、春風未老、故園無恙。籬笋新抽江燕出、蘆芽半捲河豚上。豆畦辺、薺美采盈筐、東隣餉。○柴門外、微波漾、芳樹杪、時禽唱。好邀來春社、細斟家釀。歡喜兒童鵬脚果、逍遙父老蛇条杖。恕余頑、醉後越痴狂、真無狀（柳浪方に高く、桃花雨りて、一村都て漲る。応に自ら慰むべし、春風未だ老いずして、故園恙無きに。籬笋新たに抽きて江燕出で、蘆芽半ば捲きて河豚上る。豆畦の辺、薺美くして采りて筐に盈たし、東隣餉る。○柴門の外に、微波漾ひ、芳樹の杪に、時禽唱ふ。好く春社に邀へ来たつて、細かに家釀を斟むべし。歡喜す兒童鵬脚の果、逍遙す父老蛇条の杖。余れの頑としして、酔後越ます痴狂なること、真に状無きを恕せ）。

王士祿「滿江紅・用曹顧菴江村韻」（『十五家詞』卷一一所收『炊聞詞』卷下）

檢校帰思、共春後、碧溪同漲。山有信、鶴猿相憶、釣磯無恙。雨滲一犁田、犢喜、波添三尺河魚上。道同招、冀缺共妻帰、謀耕餉。○五柳畔、晴糸漾、老屋上、春鳩唱。更掌教鳥集、花從蜂釀。曉日好操蘋渚楫、晚風任倚柴門杖。縱田家、佳語愧儲王、還能狀（帰思を

檢校（おぼ）すれば、春後の、碧溪と同じく漲る。山より信有り、鶴（鶴）猿相憶ふ、釣磯（釣磯）恙無きやと。雨滲（ひた）すこと一犁にして田犢喜び、波添ふこと三尺にして河魚上らん。道（おほ）ふ招（おほ）きに同じて、冀缺より妻と共に帰つて、耕餉を謀らんことを。○五柳の畔、晴糸漾ひ、老屋の上、春鳩唱ふ。更に掌は鳥をして集めしめ、花は蜂の釀すに従す。曉日好く蘋渚の楫を操るべし、晚風柴門の杖に倚るに任す。縦（た）ひ田家の、佳語儲（儲）王（王）に愧じんも、還た能く状（た）べん。※「山有信」は、自注に、岑参の詩語を用いたとある。この岑参の詩語とは、「還高冠潭口留別舍弟」詩のこと。「山有信」の語のほか、詩全体の構成を襲っている。ただ、岑参詩は山から湖畔に帰るのに対し、王士祿の詞では、湖畔から山へ帰ることを述べる。「鶴猿」は、隱者の仲間、つまり隱棲した人のこと。岑参の詩では、岑参の隱者仲間である「杜陵叟」に相当する。「雨滲一犁」は、「一犁雨」を言い換えたもの。農作業をするのによろしい春の雨。また、「犁」は王士祿の故郷である山東省済南の古い地名なので、地名と掛けて言ったものかもしれない。「晴糸」は、春になるとただよう蜘蛛の糸のようなもの。

宋琬「滿江紅・王西樵客遊武林、曹顧菴賦詞志喜、属予和之」（『十五家詞』卷七所收『二郷亭詞』卷下）

花落錢唐、江流闊、潮痕初漲。問足下、何由至此、布帆無恙。儵爾波濤如夢裏、趺然屐齒來天上。恰湘湖、蓴菜十分肥、為君餉。○西湖畔、春波漾、疎柳外、暝樵唱。有青油画舫、烏程佳釀。風暖遙伝靈隱磬、天晴急策韜光杖。倚危欄、百尺看銀塘、龍蛇狀（花錢唐に落ち、江流闊く、潮痕初めて漲る。足下に、何に由りてか此に至ると問へば、布帆恙無しと。儵爾として波濤夢裏の如く、趺然として屐齒天上より來たる。恰も湘湖、蓴菜十分に肥ゆ、君が為に餉らん。○西湖の畔、春波漾ひ、疎柳の外、暝樵唱ふ。青油の画舫、烏程の佳釀有り。風暖くして遙かに伝ふ靈隱の磬、天晴れて急に策く韜光の杖。危欄、百尺に倚りて銀塘を看れば、龍蛇の状なり）。※「韜光」は、唐代の僧の名。靈隱山の西の雲林寺に留まった。

王漁洋の『王考功（王士祿）年譜』に拠ると、この和韻詞が制作されたのは、康熙四年（一六六五）三月、父親の王与敕と武林（杭州）に旅行した時である。この時、王士祿は四〇歳。

詞題を見ると、まず、曹爾堪が「江村」を作り、それに王士祿が和詞を作り、それを見た曹爾堪が宋琬に和詞制作を請うたらしい。彼ら三人が和韻した詞は各々八首で、原作の「江村」を含めれば、全部で二五首に及ぶ。これらの詞は、王士祿の詞題に「湖上遇顧菴見余和詞、用韻見東、復次奉答（湖上に顧菴に遇ひ余が和詞を見ず、韻を用ひて束せらる、復た次して答へ奉る）」などであることから、

一時になったものではなく、王士祿の杭州滞在中に次第に作られていったものと思われる。

内容を見てみると、曹爾堪の原作は、題名通り春の只中にある江南民家の風景を詠じている。この風景は、「応自慰、春風未老、故園無恙（春風衰えず、ふるさと事もなし、このおだやかな光景に、わたしの心は安らぐよ）」とあるように、おだやかかで、心落ち着く故郷の景色なのである。曹爾堪は浙江省の出身。地元だけあって、よくその特徴を詠み込んでいる。前関の「柳浪」「桃花（桃花源記を想起）」「江燕」「蘆芽（水生植物）」「河豚（北宋・梅堯臣「范饒州坐中客語食河豚魚」詩（『宛陵集』卷五）に拠ると、春になると河豚は珍重され、南方の人は美味と述べたという）」「東隣（宋玉「好色賦」の「東家之子」を想起）」などは、江南を想起させる風物である。そして、この詞はただの風景描写に止まらず、春の江村の楽しい雰囲気、それを楽しむ自身の気持ちも詠み込んでいる。「応自慰」「怨余頑云云」などから、それは察せられる。強い主張こそ窺えないが、故郷の風景とそれを楽しむ心を詠じた曹爾堪のこの詞は、決して虚構の詞ではないのである。

では、王士祿の和韻詞はどうであろうか。王士祿は前関で、主に自身の旅愁と懷郷の念を詠じている。曹爾堪の原作は、江南の風景を主に詠じているとはいえず、その風景は彼の故郷でもあるわけだから、王士祿の江南にあって故郷を思うという構成は原作を踏襲していると言える。しかし、その内容は原作と異なる。王士祿の故郷は杭州とは真逆、

中国北部に位置する山東省の済南である。故に、「檢校帰思、共春後、碧溪同漲（帰郷の思いはどれほどかといえ、春にかさ増す潮ほど）」というように、春の江南の美しい景色にも、ふとしたことで旅愁を起こすのだ。そして、故郷からの手紙を得ることで、ますます故郷への思いを募らせ、また、隠居生活への憧れを述べる。詠み込まれているものも、「山」「鶴猿」「一犁（済南を示す地名の可能性がある）」「河魚（黄河の魚）」など、江南ではなく、山林のものや、北方の風物を示すものが多くなる。

後関は、恐らく故郷の済南での隠居生活を想像したものだろう。「五柳」といえば、陶淵明の「五柳先生伝」を想起するが、王漁洋が済南の大明湖で「秋柳四首」を作ったように、済南にも当然柳に関する名所がある。つづく「老屋」という言葉が、故郷の古巢を述べたものとするなら、この「五柳」は、王士祿が当時滞在した江南のイメージと故郷の済南のイメージとを兼ねた表現と見るべきだろう。そして、「更掌教鳥集、花従蜂釀。暁日好操蘋渚楫、晚風任倚柴門杖（山には鳥がおのずと集い、花は蜂がはちみつを作るための蜜をとっていくのを見守る。朝は浮草覆う川面に舟を浮かべるが心地良く、暮れには山歩きを気ままに楽しむ）」といった、江南とは違う故郷の風景のなかで、ゆったりとした農民のような生活を送る楽しみを想像して述べるのだ。そして、王維や儲光羲といった田園詩人には及ばないまでも、田園詞をこれからも作り続けようと自身の理想の生きざまを宣言する。後関で、自身の楽しみや生

きざまを述べるのは、曹爾堪の原作と同様だが、曹爾堪が江南の春と酔郷の楽しみを述べるのに対し、王士祿は江南の春と田園詩人として生きたいと述べるなど、その性質は異なる。とりわけ、田園詩人として余生を送りたいというのは、王士祿の個性を表している。というのも、王漁洋に王維ら自然派詩人の詩を学ぶよう仕向けたのは王士祿だったからである（『居易録』巻五に、「時先長兄考功……見予詩甚喜、取劉頃陽先生所編『唐詩宿』中王・孟・常建・王昌齡・劉虛・韋應物・柳宗元數家、使手鈔之」とある）。自然、王士祿の好みも王維ら自然派詩人に傾いていたと言えるし、この詞がその傍証ともなり得よう。

最後に宋琬の和韻詞の内容を見てみよう。題名を見るに、頼まれて作った和韻詞であること、また、最も遅い順番で制作したこと、杭州に來た王士祿を江南の名産・名勝で歓迎することを述べた無難な内容に落ち着いている。詞中には、「錢唐」「湘湖」「蓴菜」「西湖」「烏程佳釀」「蠶隱」「韜光」など、杭州に係する語彙をちりばめるのは、曹爾堪の原作といささか似ている。しかし、そのような語彙に交えて、「問足下」「為君餉」など知人を歓迎する意思を織り交ぜて詠み込むこの詞は、曹爾堪や王士祿の詞とは違った内容を持つており、ただの模倣に止まらないのは、さすがに名を知られた文人なだけある。ただし、宋琬らしさを示す個性のようなものは見られない。

以上、見てきたように、王士祿と宋琬ともに、曹爾堪の原作をそっくりそのまま模倣するということはなかった。

彼らの和韻詞には、自身の当時の感情や状況が詠み込まれていた。とりわけ、王士祿は江南の風景から、帰郷の念を募らせ、自身の故郷や、理想の生き方を述べるという個性を表出することに成功していた。王士祿と張杞の和韻詞との違いは一目瞭然である。ただし、張杞は小令の作だったのに対し、王士祿は長調の詞であったという違いがあるため、さらに確実な違いを知るためには、共に小令の和韻詞を見比べることが必要になってくるだろう。また、王士祿の和韻詞の特徴が、次韻というきびしい制作環境に身を置いたことと、どう関係してくるのかまでは、さらに考察を加えねばならないが、それは、今後の課題としたい。また、王漁洋にも多くの和韻詞、特に李清照に和した詞がたくさんあるが、この考察も後に期したい。

【八】

温・李⁽¹⁾ 齊名。然温実不及李。李不作詞、而温為『花間』⁽²⁾鼻祖⁽³⁾。豈亦同能不如独勝之意耶⁽⁴⁾。古人学書不勝、去而学画、学画不勝、去而学塑⁽⁵⁾、其善于用長⁽⁶⁾如此。

【書き下し文】

温・李名を齊しくす。然れども温実⁽¹⁾は李に及ばず。李は詞を作らず、而して温は『花間』の鼻祖と為れり。豈に亦た同じく能くするものは独り勝れるものに如かざるの意ならんや。古人書を学んで勝らざれば、去つて画を学び、画

を学んで勝らざれば、去つて塑^そを学び、其の長を用ふるに善きこと此くの如くす。

【注釈】

(1) 温・李 温庭筠と李商隱のこと。

(2) 『花間』 ここでは、「花間詞派」という意味合いが強いように感じるが、【二】注(1)で述べた理由により、『花間集』という書名の意にとっておく。なお、「花間詞派」の特徴については、夏承燾氏は次のように述べている。

さらにやかな言葉、含みのある婉曲な表現方法をもつて、『花間集』では女性の美貌とファッション、及び、彼女たちの離別の悲しみや恨みを描く、この「花間」詞派の大体はこのように構成されている(華麗的字面、婉約的表達手法、集中来写女性的美貌和服飾以及她們的離愁別恨、這樣就構成爲一箇「花間」詞派的整體)。

(3) 鼻祖 始祖。尋ね得るかぎり最も古い祖先・源流。模範として尊ぶべき人の意とも解釈できる。『花間集』の巻頭に置かれ、なおかつ、収録詞数の最も多い温庭筠は、『花間集』中の代表的な詞人であり、『花間集』に収録される詞人の多くは、彼を手本としたとされる。村上哲見『宋詞研究—唐五代北宋篇』上篇第三章「五代詞論」第一節「『花間集』と蜀の詞」一三五頁に、

前章において述べたように、温飛卿の詞がこの書の巻首に、しかも最も多くを録されているのは、この頃の、少なくとも蜀の詞壇における好尚をはつきりと示しており、蜀の詞人の作の多くには、明らかにその模倣のあとが窺われる。ただ飛卿の詞には、：：：闡怨の詞の中に、人間の本質にも迫り得る深遠な孤独感を寓し、：：：傑出した才能を抱きながら零落して果てたという彼の絶望的な心情の表出であつたとみなされ、その詞が後世に至るまで高く評価されるのは、むしろその点にあると思われるのだが、蜀の詞人においては、大方の傾向からいえば、飛卿の艶麗な筆致の模倣にのみ熱心であつて、その深刻な内面の心情はほとんど捨象されてしまつてゐる。

とある。温庭筠を「花間派」の一員に含めることもあり得るかもしれないが、王漁洋は、『倚声初集』の序文で、「温・和生而『花間』作（温・和生じて『花間』作る）」と述べているので、あくまで温庭筠は『花間集』の先駆的な存在として、「花間派」には属さないものと見做しているようである。

(4) 豈亦同能不如独勝之意耶 「豈亦く耶」は、くといふことだろうか。単に感嘆を示す語かもしれないが、ここでは、反語表現と解釈しておく。「同能」は、なんでも同じレベルでうまくこなせること。「独勝」は、一つだけ抜きんでている取り柄・能力があること。「意」は、ここでは、くという意味、くというわけ、

という意。単に「こと」「道理」などと意識しても構わないだろう。

これ以降の句は、恐らく、南宋・陆游の「跋花間集」其二（『渭南文集』卷三〇）を踏まえて述べていよう。

唐自大中後、詩家日趣淺薄。其間傑出者、亦不復有前輩閔妙渾厚之作。久而自厭然、枯於俗尚、不能拔出。会有倚声作詞者。本欲酒間易曉、頗擺落故態、適与六朝跌宕意氣差近。此集所載、是也。故歷唐季、五代詩愈卑、而倚声者輒簡古可愛。蓋天宝以後、詩人常恨文不迨。大中以後、詩衰而倚声作。使諸人以其所長格力、施於所短、則後世孰得而議。筆墨馳聘、則一能此不能彼。未易以理推也。開禧元年十二月乙卯、務觀東籬書。

（唐は大中自り後、詩家日びに淺薄に趣く。其の間傑出する者も、亦た復た前輩の閔妙渾厚の作有らず。久しくして自づから厭然として、俗尚に枯せられ、抜け出づること能はず。会たま声に倚りて詞を作る者有り。本と酒間に暁り易きを欲し、頗る故態を擺落するは、適たま六朝の跌宕の意氣と差や近し。此の集の載する所は、是れなり。故より唐季を歴て、五代の詩は愈いよ卑しきも、而れども倚声は輒ち簡古にして愛すべし。蓋し天宝以後、詩人常に文の迨ばざるを恨む。大中以後、詩衰へて倚声作る。諸人をして其の長する所の格力を以て、短とする所に施さしめば、則ち後世孰れか得てして

議せんや。筆墨をして馳騁せしめば、則ち一に此れを能くして彼を能くせず。未だ理を以て推し易からず。開禧元年十二月乙卯、務観東籬に書す。※「倚声」は、詞の別名としての用法もある。「筆墨云云」は、前の句を逆接で承けている。「一般に人が自身の長所で短所を補ったならば、後々までとやかく言われることはない。しかし、文学に関しては、（詞がうまくければ、詩が下手なように）どうしても彼我の差が出てしまう」ということ。

なお、この文章は、漁洋と鄒祗謨共編の『倚声初集』の名前の由来にもなっている。【序文】注（5）を参照。

（5）塑 泥で人形を作ること。または、泥でなにかを作ること。泥人形とはいっても、素焼きをして硬くするので、ただの粘土細工とは違う。

（6）用長 長所を生かすこと。『晋書』卷六九・劉訥伝に、「周弘武巧於用短、杜方叔拙於用長（周弘武は短を用ふるに巧みなり、杜方叔は長を用ふるに拙し）」とある。この「用長」というのは、自身の性格とか個性を作品や事業に生かすという意味になるだろう。つまり、溫庭筠には艶麗な中に奥深い意味をもたせた文学を生み出す個性があり、それが、たまたま詞に最も適合していたということである。

【訳文】

溫庭筠と李商隱とは、その詩名を並び称されている。しかし、実際のところ、溫庭筠の詩は李商隱には及んでいない。そのかわり、李商隱は詞を作ることがなく、溫庭筠は『花間集』の生まれるきっかけとなり、また、『花間集』の詞人たちが規範とする詞人となった。これは、なんでもそつなくこなす者は、たった一つでも突出した取り柄を持っている者には及ばないということなのだろうか。つまり、詞だけでなく詩も作る溫庭筠が、詩作に特化した李商隱に及ばなかったから、詞の大家になることしかできなかったということなのだろうか。否、そんなことはあるまい。むかしの人は、書道を学んで思うようにものにできなかったときは、書道を学ぶのを止めて画を学んだものだし、画を学んでうまくものにできなかったら、そのときは、画を学ぶのを止めて人形作りに鞍替えをしたように、彼らは自身の長所を生かせる分野を模索して、自身の長所をうまく生かしていたのである。

【餘説】

この第八条で注目したいのは、王漁洋が、個人の長所と文学の関係を説いていることである。

「同能不如独勝之意」とあることから、漁洋の時代では、一般的に、なんでもそつなくこなせる人は、少なくとも周囲からそう見えるような人は、ある分野だけを競わせた場

合、その分野のエキスパートには敵わないと考えられていたようだ。確かに、現代のわれわれの社会においても、たとえば、和・洋・中の料理をどれもそれなりの水準で作れる器用な人がいたとして、中華料理の達人に中華料理で勝てるかという、そうはいかないだろう。しかし、これは逆に中華料理の達人も和・洋の料理で器用な人に勝てるかという、必ずしもそうはいかない、ということでもある。つまり、李商隱も詞の制作に関しては、温庭筠に及ばないということである。

では、李商隱は詞を作れないのか、ということか、ということではない。後に、「古人云云」の例を挙げているように、各々に自身の長所を最大に生かせる分野があるということなのだ。この長所というのは、現代ならば個性と言い換えてよいものである。つまり、李商隱の個性は詩に最も適合していたということで、詞を作ったとしても、それなりの作を残していたかもしれない。反対に、温庭筠の個性は詞にこそ最も適したものであったのである。つまり、器用な人は「同能不如独勝」と見えるだけであって、自分の長所を最大限に生かせるものにまだ出会えていないというだけだと言える。

王漁洋は、人には自分の長所を生かせる分野があり、その反対もあることを、詩論の中でたびたび述べている。たとえば、『居易録』巻一四に、

無錫門人劉雷恒震修、寄華子潛『巖居稿』至。予題其卷曰、「向嘗与学子論詩云、『工于五言、不必工于七言、

工于古体、不必工于近体』。觀鴻山及唐孟襄陽集可悟。今人自古樂府・『古詩十九首』以下、無不擬者、乃妄人也」。

（無錫の門人劉雷恒震修、華子潛の『巖居稿』を寄せて至らしむ。予其の卷に題して曰く、「向に嘗て学子の与に詩を論じて云ふ、『五言に工なるも、必ずしも七言に工ならず、古体に工なるも、必ずしも近体に工ならず』と。鴻山及び唐の孟襄陽の集を觀れば悟るべし。今の人の古樂府・『古詩十九首』自り以下、擬はざる者無きは、乃ち妄人なり」と）。

とある。この五言詩に長じている者が、必ずしも七言詩に長じているとはいえないし、古体詩に工だからといって、必ずしも近体詩に優れているわけではない、というのは詞がうまいからといって詩では他人に一段劣つてしまう温庭筠と詩では格段に優れていても詞は作らなかつた李商隱、この二人のことに似ている。そして、漁洋は、自分の長所・個性を生かす術を模索することなく、安易に古典の模倣に没頭する者を「妄人」と蔑視するのである。また、漁洋がこのような論を門人のために説いているという事実も注目すべきことであろう。

【九】

「紅杏枝頭春意鬧(1)尚書」、當時伝為美譚。吾友公(2)耿極歎之、以為卓絕千古(3)。然実本『花間』「暖覺杏梢紅(4)」。特有青藍氷水之妙耳。

【書き下し文】

「紅杏枝頭春意鬧尚書」、當時伝はりて美譚と為す。吾が友公猷極めて之れを歎じ、以て千古に卓絶なりと為せり。然れども実は『花間』の「暖くして覺ゆ杏梢の紅なるを」に本づく。特だ青藍氷水の妙有るのみ。

【注釈】

(1) 紅杏枝頭春意鬧尚書 北宋・宋祁（九九八—一〇六一）のこと。字は子京、安陸（湖北省安陸市）の人、諡は景文。天聖二年（一〇二四）、兄の宋庠さうしやうと共に進士となった。時に、大小宋と呼ばれた。翰林学士承旨、工部尚書と出世していった。文名があり、歐陽脩と共に『新唐書』の編纂にたずさわった。伝は『宋史』巻二八四に見える。「紅杏云云」というのは、宋祁の「玉楼春」詞の一句で、「紅杏枝頭春意鬧尚書」と言えば宋祁を指すようになった。「歴代詩餘」巻一一四に引く『古今詞話』に、

宋子京為天聖中翰林。以賦采侯中博学鴻詞科第。有「色映珊瑚爛、声連羽月遲」之句。時呼為宋采侯。每夕臨文、必使麗姝燃双椽燭。即張子野所謂「紅杏枝頭春意鬧尚書」也。

（宋子京は天聖中の翰林たり。采彩をつけた侯侯をを賦するを以て博学鴻詞科の第に中たる。「色映じて珊瑚さうしやう爛爛はとどろくのめがや」き、声連なりて羽月遅し」の句有り。時に呼びて宋

采侯と為す。毎夕文に臨めば、必ず麗姝をして双椽の燭を燃やしむ。即ち張子野の所謂「紅杏枝頭春意鬧尚書」なり）。

とあり、また、清・李漁『窺詞管見』に、

琢句鍊字、雖貴新奇、亦須新而妥、奇而確。「妥」与「確」総不越一「理」字。欲望句之驚人、先求理之服衆。時賢勿論、古人多工於此技。有最服余心者。「雲破月来花弄影郎中」、是也。有蜚声千載上下而不能服項強之笠翁者。「紅杏枝頭春意鬧尚書」、是也。「雲破月来」句、詞極尖新、而実為理之所有。若紅杏之在枝頭、忽然加一「鬧」字、此語殊難著解。爭鬭有声之謂鬧。桃李爭春則有之、紅杏鬧春、予実未之見也。「鬧」字可用、則「妙」字、「鬭」字、「打」字皆可用也。子京当日以此噪名、人不呼其姓名、竟以此作尚書美号。豈由尚書二字起見耶。予謂、『鬧』字極麤俗、且聽不入耳、非但不可加於此句、併不當見之詩詞」。近日詞中爭尚此字、皆子京一人之流毒也。

（琢句鍊字、新奇を貴ぶと雖も、亦た新にして妥、奇にして確なるを須む。「妥」と「確」と総て一「理」字を越えず。句の人を驚かすを望まんと欲せば、先ず理の衆を服するを求めよ。時賢論ずる勿く、古人多く此の技に工なり。最も余が心を服する者有り。「雲破月来花弄影郎中」は、是れなり。声を千載上下に蜚するも項強の笠翁を服すること能はざる者有

り。「紅杏枝頭春意鬧尚書」は、是れなり。「雲破れ月來たる」の句、詞極めて尖新にして、実は理の有る所と為す。紅杏の枝頭に在るに、忽然として「鬧」字を加ふるが若きは、此の語殊に解を著け難し。争鬭して声有るを之れ鬧と謂ふ。桃李春を争へば則ち之れ有るも、紅杏春を鬧するは、予実に未だ之れを見ざるなり。「鬧」字用ふべくんば、則ち「妙」字、「鬧」字、「打」字皆用ふべきなり。子京当日此れを以て名を噪がれ、人其の姓名を呼ばずして、竟に此れを以て尚書の美号と作す。豈に尚書の二字由り見を起こさんや。予謂へらく、「『鬧』字極めて麤俗にして、且つ聴けども耳に入らざるは、但だ此の句に加ふべからざるのみに非ずして、併せて当に之れを詩詞に見はすべからず」と。近日詞中争つて此の字を尚ぶは、皆子京一人の流毒なり。※「雲破月來花弄影郎中」は張先のこと。

とある。参考に、宋祁の「玉樓春」（『草堂詩餘』卷一）を引用しておく。

東城漸覺風光好、穀皺波紋迎客棹。綠楊煙外曉寒輕、紅杏枝頭春意鬧。○浮生長恨歛娛少、肯愛千金輕一笑。為君持酒勸斜陽、且向花間留晚照（東城漸く覺ゆ風光の好きを、穀皺の波紋迎客の棹。綠楊煙外曉寒輕く、紅杏枝頭春意鬧し。○浮生長に歛娛の少きを恨むも、肯へて愛せんや千金一笑を軽んずるものを。君が為に酒を持って斜陽に勧め、且らく花間に向

いて晩照を留めん）。※「東城」は、街の東。「穀皺波紋」は、ちりめんのしわのように波立つ波紋。「紅杏枝頭春意鬧」は、杏の枝先に花が次々と競うように開くこと。「千金輕一笑」は、大金で軽々しく媚びを売る女を言う。「為君」の「君」は、「紅杏」のこと。

（2）公猷 清・劉体仁（一六一七～一六七六）のこと。

字は公猷、号は蒲菴、潁州（安徽省阜陽市）の人。順治一二年（一六五五）の進士。考功郎中（吏部稽勲司郎中）となった。『七頌堂集』一四卷がある。伝は『清史稿』卷四八四に見える。王秋生校点『七頌堂集』（黃山書社、二〇〇八）に年譜が附録されている。

（3）卓絶千古 永遠に伝わるほどに優れている。古今通じての絶唱。劉体仁『七頌堂詞繹』に、「『紅杏枝頭春意鬧』、一『鬧』字卓絶千古。『濕紅嬌暮寒』、亦復移易不得（『紅杏枝頭春意鬧し』、一『鬧』字千古に卓絶なり。『濕紅暮寒に嬌なり』も、亦た復た移易し得ず）」とある。

（4）暖覚杏梢紅 『花間集』卷六所収、五代・和凝「菩薩蠻」詞中の句。「越梅半拆輕寒裏、水清澹薄籠藍水。暖覚杏梢紅、遊糸狂惹風。○閑階莎徑碧、遠夢猶堪惜。離恨又迎春、相思難重陳（越梅半ば拆く輕寒の裏、水清澹薄として藍水を籠む。暖くして覺ゆ杏梢の紅なるを、遊糸狂にして風を惹く。○閑階莎徑碧に、遠夢猶ほ惜しむに堪へたり。離恨又た春を迎へ、相思重ねて

陳べ難し」)。※「半拆」は、ほとんど開く、という意で、梅の花がほぼ満開になること。「氷清澹薄」は、清らか且つ高潔で嫌らしさを感じさせないこと。ここでは梅を形容している。「巷風」は、風をまとう、或いは、風景を埋め尽くす、という意。『維摩詰經講經文』に、「戴霧花枝香爛熳、惹煙幡蓋勢巍巍（戴霧の花枝香爛熳たり、惹煙の幡蓋勢ひ巍巍たり）」とある。

(5) 青藍氷水之妙 「出藍之營」というのに近い。『荀子』勸学篇に、「青取之於藍、而青於藍。氷水為之、而寒於水（青は之れを藍より取れども、藍よりも青し。氷は水之れを為れども、水よりも寒し）」とあるのに基づく。しかし、ここでは、ニュアンス的に、元になるものよりも優れたものを生み出す能力を備えていることを言う。

【訳文】

宋祁が自身の「玉楼春」詞によって、「紅杏枝頭春意鬧尚書」と呼ばれたことは、宋代当時から、美談として伝わっていた。わが友、劉体仁は「紅杏枝頭春意鬧し（杏の枝の端に春が到来して、次々と紅の花を咲かせていった）」の句を絶賛して、永久に伝えられるべき絶唱と見做していた。しかし、実のところ、宋祁のこの句は、『花間集』に載せる和凝の「暖かくなつたので、杏の枝は紅に染まったことだろう」というのに基づいているのだ。だから、宋祁

には、ただ古典の良さをうまく汲み取って、更にすばらしい句を生み出す能力が備わっていたというだけのことだ。

【餘説】

王漁洋は宋祁の「紅杏枝頭春意鬧」という句を、「暖覚杏梢紅」よりも優れていると見做しておきながら、「特有青藍氷水之妙耳」と、いささか含みのある言い方をしている。これは、宋祁の句はなお獨創性に欠けるということを暗に示しているのかもしれない。しかし、王漁洋は、古典のエッセンスをうまく吸収してさらに良い作品を作り出す宋祁の特性を非難しているわけでは決してない。それは、次の文章を見れば分かる。

宋人詩、至歐・梅・蘇・黃・王介甫、而波瀾始大。前此楊・劉・錢思公・文潞公・胡文恭・趙清猷輩、皆沿西崑體。王元之獨宗樂天。然予觀宋景文近體、無一字無來歷、而對仗精確、非謗万卷者不能。迥非南渡以後所及。今人耳食、譽者毀者、皆矮人觀場、未之或知也（『香祖筆記』卷一〇）。

（宋人の詩、歐陽修・梅堯臣・蘇軾・黃庭堅・王安石に至りて、波瀾始めて大なり。此れに前んじては楊・劉・錢思公・文潞公・胡文恭・趙清猷の輩、皆西崑の体に沿ふ。王元之の独り樂天を宗とするのみ。然れども予宋景文の近體を觀るに、一字として來歴無くは無く、而も對仗

精確にして、万卷を読む者に非ずんば能くせず。廻かに南渡以後の及ぶ所に非ず。今の人耳食して、誉むる者も毀る者も、皆矮人観場にして、未だ之れ知るもの或らざるなり。

また、同様の文章が『古夫于亭雜錄』巻一にも見える。

余觀宋景文詩。雖所伝篇什不多、殆無一字無來歷。明諸大家、用功之深如此者絶少。宋人詩何可輕議邪。

(余れ宋景文の詩を觀る。伝はる所の篇什多からずと雖も、殆ど一字として來歴無くは無し。明の諸大家、用功の深きこと此くの如き者絶だ少し。宋人の詩何ぞ輕議すべけんや)。

王漁洋は右に見えるように、よく古典を学んで、それを詩作に生かしていた宋祁に、一定の評価を加えていた。晩唐の李商隱に倣つて華麗な修辭と典故に拘つた「西崑体」、「矮人観場」、明の七子を指すであろう「明諸大家」などの語があることから、宋祁の例は、限定的な古典の模倣を無闇に繰返すだけの古文辞派を批判するため、一種の引き合いとして提出されたものかもしれない。しかし、王漁洋が詩作において、才能のほかに学問的素養を重視していたのも間違いない事実なのである。清・王猷の「突星閣詩集」に題した序文(『帶經堂集』巻四一)に、

夫詩之道、有根柢焉、有興會焉。二者率不可得兼。『鏡中之象、水中之月』、『相中之色』、『羚羊掛角、無跡可求』、此興會也。本之風・雅、以導其源、泝之楚騷、漢魏樂府詩、以達其流、博之九經・三史・諸子、以窮

其變、此根柢也。根柢原於學問、興會發於性情。

(夫れ詩の道に、根柢有り、興會有り。二者率ね兼ねるを得べからず。『鏡中の象、水中の月』、『相中の色』、『羚羊角を掛けて、跡の求むべき無し』とは、此れ興會なり。之れが風・雅に本づき、以て其の源に導き、之れが楚騷、漢魏の樂府詩に泝り、以て其の流れに達し、之れが九經・三史・諸子に博め、以て其の變を窮むるは、此れ根柢なり。根柢は學問より原ね、興會は性情より發す)。

とある。恐らく、詞においても、學問的素養に基づく「根柢」と、新奇な発想を生む才能による「興會」は重要なものだったに違いない。漁洋が「二者率不可得兼」と言うように、「根柢」と「興會」は、往々にしてうまいぐあいに同居させることはできないものだった。少なくとも漁洋はそうように考えていた。

右に挙げた筆記から、宋祁が「根柢」を備えていたと漁洋は考えていた、そのように見てよいだろう。しかし、「興會」は備わっていなかった。だからこそ【九】で、「特有青藍氷水之妙耳」と含みのある言い方をしたのである。また、「特有く耳」といった言い回しからは、いささかの不満も読み取れる。これは、五代の詞に対する劉体仁の認識に不満を抱いていたのかもしれない。劉体仁の『七頌堂詞繹』に、

詞亦有初・盛・中・晚、不以代也。牛嶠・和凝・張泌・歐陽炯・韓偓・鹿虔扈輩、不離唐絕句、如唐之初未

脱隋調也、然皆小令耳。至宋則極盛、周・張・柳・康、蔚然大家。至姜白石・史邦卿、則如唐之中。而明初比唐晚。蓋非不欲勝前人、而中実枵然、取給而已、於神味処全未夢見。

(詞に亦た初・盛・中・晩有り、代を以てせざるなり。牛嶠・和凝・張泌・歐陽炯・韓偓・鹿虔扈の輩、唐の絶句を離れざること、唐の初め未だ隋調を脱せざるが如きなり、然れば皆小令なるのみ。宋に至つては則ち極盛にして、周・張・柳・康は、蔚然たる大家なり。姜白石・史邦卿に至つては、則ち唐の中の如し。而して明初は唐晩に比す。蓋し前人に勝らんと欲せずんば非ざるも、而れども中実^実は枵然^{はがらんどう}として、取給^{自己満足するだけ}するのみにして、神味の処に於いては全く未だ夢にも見ざらん)。

とある。これは、宋詞を絶頂と見做して、五代や明代の詞はそれほど重視しないという見解である。漁洋は時代や派閥で詞の優劣を言わなかった、少なくとも、そういった姿勢で評論しているつもりではいた。そのため、劉体仁のこうした見解に多少の不滿を抱いていたとしてもおかしくはない。漁洋が宋祁の詞の典故として明記したのは、劉体仁が「未脱隋調」と、大した評論を加えずにいた和凝なのだから。

「蓬山不遠⁽¹⁾」、小宋何幸得此奇遇⁽³⁾。「麗豎然橡燭、遠山磨險⁽²⁾」、此老一生享用⁽⁴⁾、令人妬殺。

【書き下し文】

「蓬山遠からず」、小宋何の幸ひありてか此の奇遇を得たる。「麗豎をして橡燭を然やしめ、遠山をして險磨を磨せしむ」、此の老の一生享用するは、人をして妬殺せしむ。

【注釈】

(1) 蓬山不遠 仁宗が宋祁に宮女を賜った時に言った言葉。後文の「奇遇」とは、宋祁が宮女を賜った故事を指している。宋・黄昇『花菴詞選』卷二、宋祁「鷓鴣天」詞の題下注に見える。まず詞を挙げて、後に題下注を挙げる。

面黻雕鞍狭路逢、一声腸断綉簾中。身無彩鳳双飛翼、心有靈犀一点通。○金作屋、玉為籠、車如流水馬游龍。劉郎已恨蓬山遠、更隔蓬山幾万重。

(面黻雕鞍狭路に逢ふ、一声腸は断ゆ綉簾の中。身に彩鳳双飛の翼無きも、心に靈犀一点の通ずる有り。○金もて屋を作り、玉もて籠を為る、車は流水の如く馬は游龍のごとし。劉郎已に恨む蓬山の遠きを、更に隔つ蓬山の幾万重)。※「身無」の二句は、晩唐・李商隱の「無題(昨夜星辰)」詩の句をそのまま引用したもの。身は比翼の鳥のように一緒になれ

なくとも、心は一本の白い筋が通るサイの角のように通じ合っている、という意味。「劉郎」は、天台山に迷い込んだおり、仙女に出逢い、山の奥の村で一緒になって暮らしていたが、故郷が恋しくなつて仙女と別れ、下山すると何十年も過ぎていたという故事を下地^{しやう}にしている。ここでは、宋祁自身のことを喩える。「已恨蓬山遠」とは、以上の故事を意識した表現。「蓬山」は、仙人の住まう山。ここでは、宮中、あるいは皇帝の存在を喩えたもの。なお、「已A、更B」というのは、構文で、「今やただでさえAなのに、そのうえさらにB」という意味になる。

子京過繁台街、逢内家車子。中有褰簾者曰、「小宋也」。子京歸遂作此詞、都下伝唱、達于禁中。仁宗知之、問内人第幾車子何人呼「小宋」、有内人自陳、「頃侍御宴、見宣翰林学士・左右内臣曰、『小宋也』。時在車子中、偶見之、呼一声爾」。上召子京、從容語。及子京皇懼無地、上笑曰、「蓬山不遠」。因以内人賜之。

宋祁の字 北宋の都開封の大内
(子京繁台の街を過ぎしとき、内家の車子に逢ふ。中に簾を褰ぐる者有りて曰く、「小宋なり」と。子京歸つて遂に此の詞を作れば、都下伝唱して、禁中に達す。仁宗之れを知り、内人の第幾車子の何人か「小宋」と呼ぶかを問へば、内人の自ら陳ぶる有り、

「頃^{このころ}ろ御宴に侍りしとき、翰林学士・左右の内臣に宣べて『小宋なり』と曰ふを見^まく。時に車子の中に在りて、偶たま之れを見^み、一声^{「声かけただけでございませう」}を呼ぶのみ」と。上^{しやう}子京を召し、從容^{しやうよう}として語る。子京の皇懼^{きやう}として地無きに及び、上笑ひて曰く、「蓬山遠からず」と。因つて内人を以て之れに賜ふ)。

(2) 小宋 宋祁のこと。【九】注(1)を参照。

(3) 奇遇 思いがけない出会い。思いがけない良縁という意味合いも含まれる。北宋・柳永「迎新春」詞(『樂章集』大石調)に、「嶰管^{さいくわん}變青律、帝里陽和新布、晴景回輕煦。慶嘉節、当三五、列華灯、千門万户、遍九陌、羅綺香風微度。十里燃絳樹、鼇山聳、喧喧簫鼓。○漸天如水、素月当午。香徑裏、絕纓擲果無數。更闌燭影花陰下、少年人、往往奇遇。太平時、朝野多歡民康阜、堪隨分良聚。对此爭忍、独醒歸去(嶰管青律に變じ、帝里陽和新たに布き、晴景輕煦回る。慶嘉の節、三五に当たり、華灯を列す、千門万户、九陌に遍ねく、羅綺の香風微かに度る。十里絳樹を燃やし、鼇山聳え、簫鼓喧嘩たり。○漸やく天は水の如く、素月午に当たれり。香徑の裏、纓を絶ち果を擲つもの数ふる無し。更^{さら}闌にして燭影花陰の下、少年の人、往往にして奇遇あり。太平の時、朝野歡民康阜多し、分に随つて良聚するに堪ふ。此れに對すれば争^いか忍びんや、独り醒めて歸り去るに)とある。※「嶰管變青律」は、季節が春になること。「嶰管」は、嶰谷は崑崙の北にある

谷で、黄帝が伶倫に命じて、そこに生じる竹をとって音律を定めさせた。後に、管楽器を指す美称。「青律」は、氣候を予測するのに用いた律管（笛）の一つ。律管は一二本あり、各々ひと月を表している。青律は春に当たる月。氣候を知る方法は、密閉した部屋に木製の机を置き、その上に一二律管を置き、律管の中に葦の膜を焼いて作った灰を満たし、ちりめんで覆う。そして、ある季節が到来すると、その季節に応じた律管から灰が飛び出すと言われている。「陽和」は春ののどかさ。「輕煦」は、初春の暖かさ。「当三五」は、一月一五日のことで、元宵節を指す。この時は、夜中でも街中を出歩くことを許され、街中の軒先に灯籠が掲げられた。そのため、この日を灯節とも言う。小説などでは、よく男女の出会いの場として設定される。「絳樹」は、灯籠を飾り付けて輝く木のように見せかけた棒状の山車。「鼈山」は、灯籠で飾った山車。元宵節の時、街をねりあるいた。「当午」は、ここでは真夜中の意。「絶纓擲果」は、人目を気にせず男女が愛し合うこと。「絶纓」は、楚の莊王が臣下に宴会を賜ったおり、灯りが弱くなった隙に、美女の裾を引っ張る者がおり、美女はその者の冠のひもを引きちぎり、王に頼んでその人物をつきとめようとしたが、王は臣下全員に冠のひもを切らせてうやむやにした、という故事に拠る。本来は、厚くもてなすことを示す用語であるが、後にひと目をはばかりに男女が愛し合うこと

を指すようにもなった。「擲果」については、中国には、女性が意中の男性に思慕を寄せた時、その心を示すために果物を贈る風習があったらしい。西晋の潘岳は美男子だったので、多くの女性が彼に果物を放り投げ、それが車いっぱいに満ちたという。「飲民」は、幸福感に満ちた人々。「康阜」は、平和で人も物も豊かなこと。「堪」は、くするのに具合が良い、くするのにちょうどよい、という意味。「随分」は、太平の世を享受して、あるいは、当然のように、といった意味。「良聚」は、良い会合。ここでは、互いに気の合いそうな男女が会合すること。

(4) 麗豎然橡燭、遠山磨陰廐 宋祁が『新唐書』を編纂していたときに、傍らに侍女をはべらせていたことと、宋・吳敏が文章を書くとき、遠山という侍女に墨をすらせたという故事を指す。王世貞の『藝苑卮言』巻六に、

辺庭^{ミナト}実以按察移疾還。每醉則使兩伎肩臂、扶路唱樂。觀者如堵、了不為怪。閨中許宗魯・何棟、西蜀楊名無夕不縱倡、漸以成俗。有規楊用修者。答書云、「文有仗境生情、詩或托物起興。如崔延伯、每臨陣則召田僧超為壯士歌。宋子京修史、使麗豎然橡燭。吳元中起草、令遠山磨陰廐。是或一道也。走豈能執鞭。古人聊以耗壯心、遣餘年。所謂『老顚欲裂風景』者、良亦有以。不知我者不可聞此言、知我者不可不聞此言」。

(辺庭実按察を以て疾を移して還る。酔ふ毎に則ち兩伎をして臂を肩ひ、路を扶けて楽を唱はしむ。観る者堵の如きも、了に怪と為さず。関中の許宗魯・何棟、西蜀の楊名は夕として倡を縦まにせざるは無く、漸く以て俗と成る。楊用修を規者有り。答書に云ふ、「文に境に仗つて情を生ずるもの有り、詩に物に托して興を起すもの或り。崔延伯の如きは、陣に臨む毎に則ち田僧超を召して壮士の歌を為らしむ。宋子京は史を修むるに、麗豎をして椽燭を然やしむ。吳元中は起草するに、遠山をして陰麋を磨せしむ。是れ或いは道を一にするものなり。走るに豈に能く鞭を執らんや。古人聊か耗壯の心を以て、餘年を遣る。所謂『老顛』とし、て風景を裂かんと欲す』とは、良に亦た以有り。我れを知らざる者は此の言を聞くべからず、我を知る者は此の言を聞かざるべからず」と)。

とある。楊慎の手紙は『升庵集』巻六に見え、同様の文が『升庵詩話』巻三にも見える。なお、宋祁の故事は、宋・魏泰『東軒筆錄』巻一五に見え、吳敏の故事は、宋・徐夢莘『三朝北盟會編』巻五四、靖康中帙二九に引く『詩選』に見える。

「椽燭」は、たるきのような、大きい蠟燭。「陰麋」は、麋の産地。漢代、陝西省汧陽県（今の鳳翔県）にあった。後、麋を指すようになった。

(5) 此老 先人。または、先賢。『顔氏家訓』雜藝篇

に、「更生為蘇、先人為老（更生を蘇と為し、先人を老と為す）」とある。前述の「麗豎然椽燭、遠山磨陰麋」は、宋祁と吳敏、二人の故事を指すが、ここでは、宋祁だけを指して言ったもの。

(6) 享用 「享受」に同じ。ある恩恵を受けて、満足を得ること。満足を得られるような待遇を受けること。動詞として用いられるが、ここでは、便宜上、「(身に)受けてきた厚遇」と訳出した。唐・杜佑『通典』巻五一「兄弟俱封各得立禰廟議」に、「徐禪非荀是虞曰、『(省略)今譙王為長。既享用重祿』(徐禪荀を非とし虞を是として曰く、『(省略)今譙王長と為る。既に重祿を享用す』と)」とある。また、『三国演義』第五五回に、「昭曰、『公瑾之謀、正合愚意。劉備起身微末、奔走天下、未嘗享受富貴。今若以華堂大廈・子女金帛、令彼享用、自然疎遠孔明・関・張等』(昭曰、『公瑾の謀、正に愚が意に合す。劉備身を微末より起こし、天下を奔走して、未だ嘗て富貴を享受せず。今若し華堂大廈・子女金帛を以て、彼れをして享用せしめば、自然に孔明・関・張等を疎遠にせん』と)」とある。

【訳文】

詞が縁で宮女を賜った「蓬山遠からず」という故事があるが、宋祁はいったいどんな幸運に恵まれてこの良縁を得たのか。また、文を作る際に「麗しき腰元に蠟燭に火を灯

させ、美しい侍女に墨をすらせる」、宋祁が生涯で受けてきた厚遇は、憎らしいほど羨ましいものだ。

【一一】

「仮使⁽¹⁾當時俱不遇、老了英雄⁽²⁾」、舒王⁽³⁾自負語也。僕則謂「彦回⁽⁴⁾幸作中書郎而死、故当不失名士⁽⁵⁾」。

【書き下し文】

「仮使⁽¹⁾し当時俱に遇はずんば、英雄を老い⁽²⁾くさしめん」とは、舒王が自負の語ならん。僕は則ち謂⁽³⁾へらく、「彦回幸ひに中書郎と作りて死するが故に、当に名士を失せざるべし」と。

【注釈】

(1) 仮使⁽¹⁾當時の二句 北宋・王安石「浪淘沙・伊呂」詞中の句。「伊呂両衰翁、歷遍窮通。一為釣翁一耕農。仮使⁽¹⁾當時俱不遇、老了英雄。○湯武一相逢、風虎雲龍。興王只在笑談中。及至而今千載下、誰与争功（伊呂両つながら衰翁にして、窮通を歷遍⁽²⁾くす。一は釣翁たり一は耕農。仮使⁽¹⁾し当時俱に遇はずんば、英雄を老い⁽²⁾くさしめん。○湯武一たび相逢ふこと、風虎雲龍のごとし。王を興⁽³⁾こすこと只だ笑談の中に在り。而今千載の下に至るに及んでは、誰れと与にか功を争はん）」（『花菴詞選』卷二）。※「伊呂」は、殷の湯王の宰相

伊尹と周の武王の宰相呂尚（太公望）のこと。「一為釣翁云云」に関して、伊尹は莘（河南省）で耕作をしていたことがあり（『孟子』万章篇上に、「伊尹耕於有莘之野」とある）、呂尚は渭川のほとりで釣りをしていたところを武王に見出された。「歷遍」は、一通り経験する、または、最初から最後までわたり歩く、といった意味。「窮通」は、「窮達」と同じ。困窮と栄達のこと。「仮使」は、仮定の意。「たとひ」と読んで譲歩の意を表すこともあるが、仮定の用法もすでに『史記』に見える。なお、王安石『臨川文集』卷三七、宋・曾慥⁽⁴⁾編『樂府雅詞』卷上、明・陳耀文『花草粹編』は、「仮使」が「若使」となっている。「若使」は、仮定を示す。「老了」は、無駄に老いさらばえさせてしまふ、という意。「湯武」は、殷の湯王と周の武王のこと。「風虎雲龍」は、君主と賢臣が会合すること。『易』乾卦・文言伝に、「九五曰……風從虎、雲從龍。聖人作而万物覩⁽⁵⁾（風は虎に従ひ、雲は龍に従ふ。聖人作⁽⁶⁾りて万物覩⁽⁵⁾る）」とあるのに基づく。「及至云云」の句、『臨川文集』・『樂府雅詞』・『花草粹編』は、「直至如今千載後」となっている。

(2) 舒王 王安石（一〇二一—一〇八六）のこと。字は介甫、号は半山。荊国公に封じられたので、後に王荊公と呼ばれ、文と諡されたので、王文公とも呼ばれる。撫州臨川（江西省臨川市）の人。「舒王」とは、徽宗の政和三年（一一一三）に追封された称号による。

仁宗の慶曆二年（一〇四二）の進士。進士及第後、地方官を歴任し、神宗の時に礼部侍郎同中書門下平章事となり、「新法」と呼ばれる政治改革を行った。晩年、息子の死を機に、江寧（江蘇省南京市）郊外の鍾山に隠棲した。隠棲中に、詔をたまわって司空となった。伝は、『宋史』卷三二七に見える。

(3) 彦回 齊の褚淵のこと。字は彦回、諡は文簡。陽翟（河南省禹県）の人。劉宋の時、文帝の娘を娶って、駙馬都尉を拝領した。明帝の死後、遺詔によって中書令となった。齊の高帝の時、南康郡公に封ぜられ、さらに、尚書令を加えられた。当時の人は、劉宋の時に高い官職に就いていた者が、二君に仕えるという無節操を誇った。齊の武帝の時、新たに司空・驃騎將軍の役職を加えられた。伝は、『南齊書』卷二三、及び、『南史』卷二八に見える。ここでは、王安石のことを喩えている。

(4) 中書郎以下の語 『南史』卷二八・褚炤伝に、「炤、字彦宣。彦回従父弟也。……炤少有高節。……常非彦回身事二代。……彦回拜司徒、賓客滿坐。炤歎曰、『彦回少立名行、何意披猖至此。門戸不幸、乃復有今日之拜。使彦回作中書郎而死、不当是一名士邪。名德不昌、遂有期頤之寿』（炤、字は彦宣。彦回の従父弟なり。……炤少くして高節有り。……常に彦回の身づから二代に事ふるを非とす。……彦回司徒を拝し、賓客坐に滿つ。炤歎じて曰く、『彦回少くして立ち名行はるる

に、何の意ありてか披猖すること此に至れる。門戸不幸にして、乃ち復た今日の拜有り。彦回をして中書郎と作りて死せしめば、当に是れ一名士なるべからずや。名徳昌んならざるも、遂に期頤の寿有らん』」とあるのに基づいた言い方。「中書郎」は、「中書侍郎」・「中書令」というのに同じ。機密事項を扱う役職。宰相。

【訳文】

「もしも、当時、伊尹も呂尚も、彼らの才能を認め拔擢してくれる主君にめぐりあっていなかったなら、きつと二人のような英雄を無駄に老いさらばえさせてしまったことだろう」というのは、王安石が自身の才能を誇った言葉なのだろう。しかし、わたしは、「褚淵は運よく中書郎という高い地位に就いて後に死んだから、名士の称を失わずにすんだのだろう」と思うのだ。

【餘説】

王漁洋は、王安石のことが嫌いだった。少なくとも、漁洋の著作からは王安石に対する肯定的な評価はほとんど得られない。少ない肯定的な意見でさえ次に挙げるように、微妙な評価である。

亮公之後、学杜・韓者、王文公為巨擘。七言長句、蓋歐陽公後勁、蘇・黃前茅。特其妙処微不逮数公耳。鈔

王詩一卷（『古詩選』七言詩凡例）。

（時解亮公の後、杜・韓を学ぶ者、王文公もて巨擘と為す。

七言長句、蓋し歐陽公の後勁にして、蘇・黃の前茅な

らん。特だ其の妙処微かに數公に逮ばざるのみ。王詩

一卷を鈔す）。※「亮公」は歐陽脩のこと。宋の哲宗

の紹聖三年（一〇九六）、亮国公に追封されたことに

よる呼び名。「巨擘」は、抜きんでた人。「後勁」は、

しんがりのこと。後に有力な後継者を指して言うよう

にもなった。「前茅」は、敵情視察する兵車が敵を確

認した時に茅旌（かやを旗に見立てたもの）を立てて、

後方の味方に報せること。つまり、斥候のことで、後

に何かの先駆者のことを言うようになった。

右に見えるように、詩人としての王安石には、一定の評

価を加えてはいたようである。しかし、これは本当に例外

的な評価で、漁洋の王安石に対する評価は、おおむね敵し

いのばかりである。たとえば、『池北偶談』巻八・談猷

四「穆文簡論王安石」では、穆孔暉の手紙を引用して、王

安石批判をしている。

堂邑穆文簡公孔暉、弘治中、鄉拳領解、出王文成公之

門、為理学大儒。然其学多入禅宗、其古文精勁、自子

書出、可匹崔文敏公後渠。如「送沈朝綬」・「送王如行」

諸序可見。予尤喜其「与武城王文定公道論王介甫書」。

今録於此。

孔暉頓首純甫先生足下。昨在陽明先生坐上、同觀象山

「荊国祠堂記」。予時未敢謂然者。必象山之意、多為

荊公恕、不為人之社稷計、不為天下生靈憂、不為後學

慮。恕一夫而不憫天下後世、此何心哉。不然乃象山之

偏見自喜也。將以正名定罪、釈天下蒼生之憤、為社稷

大計、不当姑隨也。大舜殛鯀於羽山、鯀之惡不大於安

石、安石之罪浮於鯀。予謂以安石擬鯀可也。鯀名重、

安石亦名重。鯀悻直自用、安石亦悻直自用。鯀圯族、

安石圯族。鯀陞汨、安石亦陞汨。鯀不能除天下之害、

亦不能成功。安石禍及天下生靈、生靈何辜。宋之元氣、

遂不復振、其罪尚為不浮於鯀乎。夫以傾人社稷、流毒

四海者、尚取其志、堯舜当取鯀之志矣。何者、鯀之志、

欲平水土也。孟子曰、「食志乎、食功乎」。安石之操介、

在古人一節之士甚多、未可以一節而揜元惡也。非聖人

無法、聖人作『春秋』以訓万世。安石独廢之、不容誅

矣。安石秉『周礼』、蓋功利之心勝也。何者、『周礼』

之政、天無曠時、地無曠利、人無曠力、此聖王所以富

天下者、尽三才之道者也。安石慕其近似、專以利言、

又無管仲之才。所以万無一利、而害不可勝言矣。天下

以為君子者、安石惡之。天下以為小人者、安石好之。

好人之所惡、惡人之所好、此之謂私人之性。辟則為天

下僂矣。欲恕安石者、是求為過高之論。恐誣後学不淺。

不審聰鑑以為何如。孔暉頓首。

（山東省堂邑の穆文簡公孔暉、弘治中、郷拳領解し、王文成公

の門より出でて、理学の大儒と為る。然れども其の学

は多く禅宗に入り、其の古文は精勁にして、子書自ら

出で、崔文敏公後渠に匹すべし。「沈朝綬を送る」・「王

如行を送る」諸序の如きは見るべし。予尤も其の「武城の王文定公道に与えて王介甫を論ずるの書」を喜ぶ。今此ここに録す。

孔暉純甫先生の足下に頓首す。昨陽明先生の坐上に在りて、同に象山の「荊国祠堂記」を観る。予時に未だ敢へて然りと謂はざる者なり。必ず象山の意、荊公の為に恕すこと多く、人の社稷の為に計らず、天下の生靈の為に憂へず、後学の為に慮らじ。一夫を恕して天下の後世を憫へざるは、此れ何の心ぞや。然らずんば乃ち象山の偏見にして自ら喜ぶのみならん。將に名を正し罪を定めて、天下蒼生の憤りを釈くを以て、社稷の大計と為さんとするは、当に姑らく随ふべからざるなり。大舜鯀を羽山に殛すも、鯀の悪は安石よりも大ならず、安石の罪は鯀に浮ぐ。予謂ふに安石を以て鯀に擬するも可ならん。鯀の名重く、安石も亦た名重し。鯀倖直にして自ら用ひ、安石も亦た倖直にして自ら用ふ。鯀族を圯ち、安石も族を圯つ。鯀陞泊し、安石も亦た陞泊す。鯀天下の害を除くこと能はず、亦た功を成すこと能はず。安石の禍天下の生靈に及ぶも、生靈何の辜かあらん。宋の元氣、遂に復た振はず、其の罪尚ほ鯀に浮ぎずと為さんや。夫れ人の社稷を傾け、毒を四海に流す者を以て、尚ほ其の志を取らば、堯舜も当に鯀の志を取るべし。何となれば、鯀の志、水土を平げんと欲するのみ。孟子曰く、「志に食ましむるか、功に食ましむるか」と。安石の操介、古人の一節の士

に在りては甚だ多きも、未だ一節を以てして元惡を拵ふべからざるなり。聖人に法無くんば非ず、聖人『春秋』を作りて以て万世に訓ず。安石独り之を廢するは、容に誅すべからず。安石の『周礼』を乗るは、蓋し功利の心勝ればならん。何となれば、『周礼』の政、天に曠時無く、地に曠利無く、人に曠力無きは、此れ聖王の天下を富ましむる所以の者にして、三才の道を尽くす者なり。安石其の近似するを慕ひ、専ら利を以て言ふも、又た管仲の才無し。万に一利も無くして、害は勝て言ふべからざる所以なり。天下の以て君子と為す者、安石は之れを惡む。天下の以て小人と為す者、安石は之れを好む。人の惡む所を好み、人の好む所を惡む、此れを之れ私人の性と謂ふ。辟せば則ち天下の僂と為さん。安石を恕さんと欲する者、是れ過高の論と為さんことを求む。後学を誣ふること淺からざらんことを恐る。審らかにせず聡鑑以て何如とか為す。孔暉頓首す。

こういった王安石批判は、彼の文学観にまで及んでいる。王介甫『唐詩百家選』全本、近牧仲開府寄來新刻。乃常熱毛辰所得江陰某氏藏本。計百有四人。有乾道己丑蘭皋倪仲傳序。略云、「予自弱冠肄業於香溪之門、嘗見是書。頃有親戚宦南昌、得之臨川以歸。惜其道遠難致、且字面漫滅、故鏤版以新其伝云」。余按其去取、多不可曉者。如李・杜・韓三大家不入選、尚自有說。然沈・宋・陳子昂・張曲江・王右丞・韋蘇州・劉脊虛

・劉文房・柳子厚・劉夢得・孟東野、概不入選。下及元・白・溫・李・皮・陸諸家、不存一字。而高・岑・皇甫冉・王建數子、每人所錄、幾羸百篇。介甫自序謂、「欲觀唐詩者、觀此足矣」。然乎、否乎。世謂介甫、「一生好惡、私人之性」。此選亦然。故物自可宝惜。然謂為佳選、則未敢謂然。請以質諸後之善言詩者。当知余言不妄（『帶經堂集』卷九一、「跋王介甫唐百家詩全本」）。

（王介甫の『唐詩百家選』全本、近ごろ牧仲開府新刻を寄せ来たる。乃ち常熟の毛扆の得る所の江陰某氏藏本なり。計百有四人。乾道己丑（五年。一一六九）蘭阜の倪仲傳の序有り。略して云く、「予弱冠自り業を香溪の門に肆め、嘗て是の書を見る。頃ごろ親戚の南昌に宦する有り、之れを臨川に得て以て帰る。其の道遠くして致し難く、且つ字画漫滅するを惜しむが故に、版を鏤み新を以て其れ伝ふと云ふ」と。余其の去取を按ずるに、曉るべからざる者多し。李・杜・韓三家もて選に入れざるが如きは、尚ほ自ら説有り。然れども沈・宋・陳子昂・張曲江・王右丞・韋蘇州・劉脊虚・劉文房・柳子厚・劉夢得・孟東野、概して選に入れず。下は元・白・溫・李・皮・陸の諸家に及ぶ

まで、一字も存せず。而れども高・岑・皇甫冉・王建的數子、人毎に録する所、百篇を羸すに幾し。介甫の自序に謂ふ、「唐詩を觀んと欲する者、此れを觀れば足れり」と。然るや、否や。世は介甫を謂ふ、「一生の好惡、私人の性」と。此の選も亦た然り。故物は自づから宝惜すべし。然れども謂ひて佳選と為すは、則ち未だ敢へて然りと謂はず。以て諸れを後の善く詩を言ふ者に質さんことを請ふ。当に余が言の妄ならざるを知るべし）。

王安石の『唐百家詩選』を批判した右と同様の文章が、『香祖筆記』卷六に三篇（この三篇は『帶經堂集』卷九十一にも収録され、若干の異同がある）、『漁洋詩話』卷中一篇、『分甘餘話』卷二に一篇見える。

（筑波大学大学院人文社会科学科博士課程）